2006年

第3回日韓・アジア教育国際会議

— 上海 —

目　　次

巻頭言 …… 04

会議の概要 …… 05

参加者名簿 …… 07

発表　抄録

◎特別講演「東アジアの過去・現在・未来」／池　明観 …… 08

◎東アジアでの日本語教育の現在と日本への期待・役割 ／ 門脇　薫［山口大学］ …… 18

◎―日本における日本語教育者として―
韓国での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生 ／ 尹 世羅［韓国・慶福女子情報産業高等学校］ …… 21

◎甘泉外国中学での日本語教育の過去・現在・未来 ／ 陳　娅［上海市甘泉外国語中学校］ …… 23

◎甘泉外国語中学校留学生部の紹介 ／ 張　婷［上海市甘泉外国語中学校］ …… 25

◎台湾における中等教育の日本語授業で見られる多文化の融合
―台中女中第二外国語の学習者の発表実例から― ／ 李 金娟［東海大学］ …… 26

◎共生力育成手段としての日本語学校 ―大阪ＹＭＣＡの現場から ／ 山佐亜津子［大阪ＹＭＣＡ学院日本語学科］ …… 33

◎日本の高校での国際理解教育実践からの発題
―参加型・獲得型の学習形態を用いた、平和学への入門学習を通して― ／ 野島大輔［千里国際学園］ …… 35

◎「東アジア地域での海外（帰国）子女教育プロジェクト」
と韓国の海外帰国子女教育 ／ 井嶋 悠［日韓・アジア教育文化センター］ …… 37

◎上海日本人学校での国際教育・海外子女教育の現状
―国や言葉を超えた交流をめざして― ／ 酒井正人［国際交流ディレクター］ …… 40
石山由美［小学部 4年担任］

◎東アジアと国際化と韓国からの展望 ／ 李　瑛鍰［韓国・麻浦高等学校］ …… 43

◎中国の中等教育における日本語教育の動向 ／ 張　国強［中国教育学会外国語専業委員会］ …… 45

参加記

［上海から］

◎小さな国際社会から大きな国際社会へ ／ 張　国強 …… 47

◎国際会議の感想 ／ 厳　偉［甘泉外国中学高校生］ …… 48

◎思い出の夏 ／ 崔　盈菲［甘泉外国語中学高校生］ …… 49

◎音楽は言葉を越えて私達を一つにした！ ／ 田　雯婷［上海甘泉外国語中学校高校生］ …… 49

［香港から］

◎上海でさらに高まった日本語への意欲／周苑儂【日本語名：愛音】［香港理工大学 2年］ …… 50

［台北から］

◎言語を超えた交流 ／ 李　金娟 …… 50

◎アジア教育国際会議に参加しての感想 ／ 蘇　家蓉［東海大学生］ …… 51

◎学生交流で得たもの ／ 姜　怡瑄［東京都立国際高等学校生］ …… 52

◎受験勉強と人との出会いからの勉強 ／ 李　薇［台北市立内湖高校生］ …… 53

[ソウルから]

◎第３回日韓・アジア教育国際会議に参加して ／ 権　俊[永登浦女子高等学校] …… 53

◎小さい交流が育むこと ／ 李　瑛鍰 …… 54

◎上海での交流会に参加してから ／ 金　珉炅[光新高校生] …… 55

◎上海で ／ キム　ヨンリム[Sogang大学生] …… 56

[日本から]

◎幅広い国際交流を求めて ／ 酒井正人 …… 56

◎東アジアの一員として ／ 石山由美 …… 57

◎東アジアの揺り籠として ／ 野島大輔 …… 58

◎「驚きの連続・・・」／ 神田尚人[大阪ＹＭＣＡ国際専門学校] …… 59

◎日韓・アジア教育国際会議に参加して ―なぜ東アジアか― ／ 山佐亜津子 …… 59

◎中日韓・アジア教育国際会議参加記 ―若い衆、上海（ここ）にあり！― ／ 二宮　聡[八洲学園高等学校] …… 60

◎東アジア圏の１(いち)メンバーとして ／ 門脇　薫 …… 61

◎身近にあった国際交流 ／ 山中七海[Mid-Pacific Institute生] …… 62

◎成長させてくれた交流会 ／ 鶴見彩乃[八洲学園高等学校生] …… 63

◎「国際会議に参加して」―異文化交流とは― ／ 大橋真由美[立命館大学大学院生] …… 64

◎気負いのないコミュニケーション ／ 里　才門[記録映画制作担当] …… 64

◎アジア教育国際会議上海 ―わずか３日間で得られること― ／ 逢坂芳郎[記録映画制作担当] …… 65

概要と連絡先 …… 66

中韓日国際教育会議　～日本語の教育を糸口に～

〔第 3回日韓・ アジア教育国際会議報告書〕 【2006年 12月 発行】

主　　催　NPO法人日韓・アジア教育文化センタ

後援・協賛　後援助成：三菱銀行国際財団
後援名義・協賛：大阪ＹＭＣＡ
国際交流基金
日韓文化交流基金

日　　程　2006年７月25日（火）～27日（木）

会　　場　中国・上海市甘泉外国語中学［所在地］上海市宣川路 400号
（公立中高一貫教育校で、在籍生徒約 2400人、内約 900人の生徒が、第 1外国語として英語と併せて日本語を学習。中国人日本語教師 8人、日本人日本語教師 4人。第 2外国語として韓国語・フランス語・ロシア語・ドイツ語を開講。日本・韓国等からの留学生が約 70人在籍。）

参加予定者　日本・韓国・台北・香港・上海からの生徒学生、日本語・国語教員、国際（理解）教育関係の教員、及び上海日本人学校、上海韓国人学校教員が参加。

主　　題　1993年から 2005年までの会議の成果・課題を踏まえ、東アジア地域・文化圏での相互理解、相互協力そして共生のありようについて、教育・文化の視座から考え、実践の方途、可能性を検討する。
その際、この会議の端緒であり特性でもある、東アジア地域における外国語教育としての日本語教育、国際（理解）教育に関わる教員（と同時に１社会人）の思い、とそれを受け止める日本側教員（と同時に１社会人）の思いとの立体性を期待している。
私達のこの特性は、現在の日韓、日中課題更にはアジア課題への他の交流等とは違った教育・文化的なアプローチとなるのではないか、と思っている。
また今回、次代を担う高校生大学生交流の深化を図ることを願い、映像関係者による記録映画制作を実施。後日、各地、各教育機関等での上映を企画。

設立への経緯

日韓の任意研究団体である「関西日本語国語教育研究会」と「ソウル日本語教育研究会」との 1993年の出会い、そして両研究会共催による下記国際会議が、基盤となっている。
1994年から 1998年までの「日韓・韓日教育国際会議」
2000年の「アジア教育国際会議」
及び、法人認証申請中の 2004年 8月、第 1回「日韓・アジア教育国際会議」の開催。
（尚、2003年に韓国では、韓国全土の日本語教員ネットワークを目指した「韓国日本語教育研究会」が、「ソウル日本語教育研究会」を核にして発足した。）

会　議　内　容

開会　7月 25日　午前 10時～ 12時

関係者　挨拶
特別講演「東アジアの過去・現在・未来」……池　明観（前、韓国翰林大学日本学研究所長）

1日目・7月 25日

［発題・討議］
【主題】東アジアとそれぞれの地域の今を「日本語教育」を切り口に共生を考える。
■ 東アジアでの日本の今とこれから
■ 東アジアでの韓国の今とこれから
■ 東アジアでの中国の今とこれから

午後 1時 30分～ 2時
☆ 東アジアでの日本語教育の現在と日本への期待、日本の役割 ……門脇　薫（山口大学）

午後 2時～ 2時 30分
☆ 韓国での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生 ……尹　世羅（慶福女子情報産業高等学校）

午後 2時 30分～ 3時
休憩

午後 3時～ 4時
☆ 中国での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生
◇上海市での日本語教育からの現状と課題～甘泉外国語中学を通して～……陳　娅（上海甘泉外国語中学）
◇上海市での留学生教育の現状と今後への期待～甘泉外国語中学を通して～……張　婷（上海甘泉外国語中学）

午後 4時～ 4時 30分
◇香港での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生 ……マギー梁　安玉（香港理工大学）

午後 4時 30分～ 5時
◇台湾での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生
「台湾における中等教育の日本語授業で見られる多文化の融合～台中女中第二外国語の学習者の発表事例から～」
……李　金娟（東海大学）

午後 5時～ 5時 30分
◇上記発題への質疑応答、及び日韓・アジア教育文化センターの役割と可能性

2日目・7月26日

発題・討議]
【主題】それぞれの地域のこれからと東アジア地域圏・文化圏との関わりを考える。
■ 日本から見た東アジア、あるいは何故今、東アジア（地域・文化圏）なのか。
■ 韓国から見た東アジア、あるいは何故今、東アジア（地域・文化圏）なのか。
■ 中国から見た東アジア、あるいは何故今、東アジア（地域・文化圏）なのか。

午前10時～11時
日本の国際化の現在と東アジアへの眼

10時～10時30分
◇大阪ＹＭＣＡから、実践を通しての発題 …… 山佐亜津子（大阪ＹＭＣＡ）

10時30分～11時
◇日本の高校での国際理解教育実践からの発題 …… 野島大輔（千里国際学園）

11時～11時40分
東アジア地域での国際（理解）教育・海外子女教育・帰国子女教育の現在
◇日本の「東アジア地域での海外子女教育プロジェクト」と韓国の海外帰国子女教育の現状と課題
…… 尹　裕淑（韓国教育人的資源部）
…… 井嶋　悠（日韓・アジア教育文化センター）

◇上海の日本人学校からの発題

11時40分～12時30分
○上海日本人学校での国際教育・海外子女教育の現状 ～国や言葉を超えた交流を目指して～
…… 酒井正人（上海日本人学校国際交流ディレクター）
…… 石山由美（上海日本人学校小学部）

12時30分～2時
昼休み

午後2時～2時30分
◇上海の韓国人学校からの発題

午後2時30分～3時
◇東アジア（地域・文化圏）と国際化と韓国からの展望
～ソウルでの日本語教育実践を通して～ …… 李　瑛鍰（麻浦高等学校）

午後3時～3時30分
休憩

午後3時30分～4時
◇東アジア（地域・文化圏）と国際化と中国からの展望
～上海での日本語教育実践を通して～ …… 張　国強（上海甘泉外国語中学）

午後4時～5時30分
意見交換、討議

午後6時～
懇親会

第3回 日韓・アジア教育国際会議参加者名簿

読み方 名　前	性別	所　属
かどわき　かおる 門脇　薫	女	山口大学教員
やまさ　あ　つ　こ 山佐亜津子	女	大阪ＹＭＣＡ教員
かんだ　なおと 神田尚人	男	大阪ＹＭＣＡ教員
の じ ま　だいすけ 野島大輔	男	千里国際学園教員
なかむらりょうすけ 中村亮介	男	千里国際学園教員
い じ ま　ゆう 井嶋　悠	男	日韓・アジア教育文化センター
さかい　まさと 酒井正人	男	上海日本人学校教員
いしやま　ゆ　み 石山由美	女	上海日本人学校教員
おおはし　ま　ゆ　み 大橋真由美	女	立命館大学大学院生
やまなか　な　み 山中七海	女	ハワイの高校生
つるみ　あやの 鶴見彩乃	女	八洲学園高校生
にのみや　さとし 二宮　聡	男	八洲学園高校教員
しょうじ　きよかず 小路清一	男	大阪ＹＭＣＡ教員
【韓国】		
ち　みょんがん 池　明観	男	前翰林大学教員
よ　そんく 呂　善九	男	光新高校教員
ぱく　ちゃふぁん 朴　且煥	男	高明商業高校教員
くおん　じゅん 権　俊	男	永登浦女子高校教員
ゆん　せ　ら 尹　世羅	女	慶福女子情報産業高校教員
い　よんふぁん 李　瑛鍰	男	麻浦高校教員
きむ　よんりむ 金　榮林	女	西江大学生
きむ　みんぎょん 金　玟炅	女	光新高校生
ぱく　みんす 朴　珉洙	男	江西高校生

読み方 名　前	性別	所　属
【台北】		
そ　か　よう 蘇　家蓉	女	東海大学生
きょう　い　せん 姜　怡瑄	女	東京都立国際高校生
り　び 李　薇	女	台北市立内湖高校生
り　きんけん 李　金娟	女	東海大学教員
【香港】		
りゃん　あんぎょく マギー梁　安玉	女	香港理工大学教員
ちょう　いえんるん 周　苑儂	女	香港理工大学生
Lau Pui Ki 劉　はいき	女	Yung Yau college教員
Leung suet ling 梁　雪玲	女	Yung Yau college生徒
【映画制作スタッフ】		
さと　さいもん 里　才門	男	記録映画制作
おおさか　よしろう 逢坂芳郎	男	記録映画制作
【上海】		
げん　しん 严　真	女	甘泉外国語高校生
げん　い 厳　偉	男	甘泉外国語高校生
さい　てい　か 崔　呈嘉	女	上海复旦大学生
まん　しょう 万　捷	男	甘泉外国語高校生
さい　えい　ひ 崔　盈菲	女	甘泉外国語高校生
でん　ぶんてい 田　雯婷	女	甘泉外国語高校生
ちょう　こっきょう 張　国強	男	甘泉外国語中学教員
ちん　あ 陳　娅	女	甘泉外国語中学教員
ちょう　てい 張　婷	女	甘泉外国語中学教員
ま　き　しょうぶん 真木勝文	男	甘泉外国語中学教員

東アジアの過去・現在・未来

池　明観

1.序

1952年以降の7年戦争、壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）と明治以降の日本

ランケの史学 ―『世界史概観』

「・・・この地球上において、若干の民族は他の民族に優越する勢力を賦与せられ、これら若干民族がもっぱら他の民族に対して影響を与えている。・・・それゆえにわれわれの目標は・・・歴史においてずばぬけた活動を示した諸民族そのものにむけられねばならない」（p.13）

「私は私のフランス史中に、偉大なる征服者とは同時に文化の伝播者たる人であると言ったが、実にシーザーの卓越していたのはこの点においてであった！」（p.54）

「アジア文化においては、最古の時期がかえって全盛期であって、ギリシャ的要素やローマ的要素の盛期にあたる第二、第三の時期には、すでにそれは大したものではなくなっていた。そして蛮族-蒙古族-の侵入とともに、アジアの文化はまったく終末を告げたのである」（p.35）

「当時の東洋に瀰漫していた野蛮は、現今においてもなお支配をつづけている」

2.東アジア不在の歴史

1919年の3・1独立宣言

「今日吾人の朝鮮独立は朝鮮人をして正当な生栄を遂げしめると同時に日本をして邪路から出でて東洋支持者としての重責を全うせしめることであり、中国をして夢にも免がれえなかった不安恐怖から脱出しうるようにすることでありまた東洋平和をその重要な一部とする世界平和、人類幸福に必要な段階となさしめることである。これがどうして区区たる感情上の問題であろうか」

近代における東アジア不在

日本の延長としての大東亜共栄圏

日本における朝鮮不在：唐、韓の区別なく‘から’

「それ朝鮮・琉球の属の如き、中華を去ることはなはだ遠からず、その書もまた同文なり」（Mジャンセン『日本―二百年の変貌』p.58）

1876年後朝鮮修信使団を迎えた東京の表情

「正装した使節一行の厳粛な市中行進は、見物人の野次と嘲りの対象となり、『おそらく威風堂々の極致を示そうと用意したはずの装束や持ち物も、物見高い人だかりと彼等の嘲笑を招くだけだった』」（Mジャンセン『日本と東アジアの隣人―過去から未来へ』p.48）

3.東アジアの現代をどう見るべきか？

戦後史における中・日・韓 ―――――――――― 軍事力即国力の発想と軍事力なき国力の発想

東アジアにおける新しい力学的関係 ――――――― 中国の覇権、日本の覇権の時代は終わって文明のバランス

東アジアの政治的リーダーシップの問題 ――――― 民族主義的右寄りのリーダーシップのこと

民主的国民への期待 ――――――――――――― 小渕恵三、金大中　1998年　日韓共同宣言

2005年：経済　日韓の交易　720億ドル（韓国赤字244億ドル）

中韓の交易　905億ドル（韓国黒字133億ドル）

市民が政治に影響する時代

池 明観先生による特別講演『東アジアにおける過去・現在・未来』

一応、題を「東アジアの過去・現在・未来」といたしましたが、序論として二つの事に触れたいと思います。東アジアの視点から中国を眺め、日本を眺め、韓国と眺めるということですね。今我々が歴史の教科書を作るとすれば、日本は日本を中心として、韓国は韓国として、中国は中国を中心として、歴史を叙述しているんですけれども、それを超えて東アジアという視点から見ていけばどうであろうか、ということを考えたいと思います。ヨーロッパでは既にヨーロッパ史を共に考え、共に学び、共に教えるという時代でありますので、我々も東アジアにおいて、東アジア史を考えなければならない時代が目の前にきているという風に思うからであります。

まず序論としてレジメに記しました、二つの事柄について触れてみたいのですが、まず大雑把に東アジア史を展望してみたい。そして、これからの将来がどうなるべきか、ということを私なりに考えて、問題提起を出したいと思いますので、どうぞ、そういう観点から、皆様からも、問題提起していただきたい、批判していただきたいと思います。

第一点は、東アジアにおける、前近代的めざめ。前近代的めざめとして、私は朝鮮史の立場から、「文禄・慶長の役」（韓国では「壬申・倭乱」と呼んでいますが）、「壬申・倭乱」のことを考えてみたい。

これは東アジアにおいて、近代に入る直前において、中国と韓国と日本が衝突した時点であろう、しかも、衝突した場所というのは、朝鮮半島において衝突した、こういうような図式であります。それで、ずっと後になってですが、中国において1840年から1842年、アヘン戦争が起きる。このアヘン戦争は今から166年前でありますが「壬申・倭乱」というのは414年前、1592年から1597年まで（７年戦争）でありますね。1598年には日本の豊臣秀吉軍が撤収してしまうという事件であります。

これは、いわば日本と朝鮮の衝突でありますが、そこには中国の明も参加する。歴史的によくいわれるのが、この戦争によって明は非常な打撃を受けて、ゆくゆくは明も滅ばなければならないという原因のひとつにもなった、大事件であります。これをどう解釈していいのか。

日本はアジアで、朝鮮を経て、中国にまで侵略しようとした。これは、近代以前における日本のアジアへの侵略であった。それと同時に、既に鉄砲が入って来て、西洋でポルトガルやスペインが植民地を持ったように、日本はアジア大陸のほうに歩みを進めたい、という事件です。しかし、これに対して私は詳しく述べるのではなくてですね、これを今日の時点で解釈してみるとこんなことが言えるのではなかろうか、と思うのであります。

これをトインビーの有名な理論「ネメシスの理論」で解釈してみたい。ネメシスというのは復讐の女神であるわけですね。いわば、東アジア全体の文明圏において、日本は周辺であった、marginalであった。周辺であったものが、この文明の中心に向けて攻撃を繰り返すわけですね、だから、これが復讐である、ネメシスである、という性格を持つわけです。

これが、1592年に始まった「壬申・倭乱」でありますけれども、そして、それに朝鮮はもちろん、明までも（中国までも）関わって大戦争になって続くのであります。日本はこれに失敗した後、徳川時代になり、比較的アジアとの関係において良い関係を持ちながらじっとしていますけれども、段々と、もう一度アジアを侵略していく。だから、私はこういう意味においては、徳川時代というのは、日本の、アジアへの侵略という矛先を当分おさめていた、潜伏的である、いわば、潜んでいた時期である思うのです。

そして、明治時代になって、日本は次の攻撃を始めるのであります。それで、日本の近代教育においては、日本の近代そのものが、アジアへの侵略であり、それを正当化しようとするがために、常に豊臣秀吉を英雄化しようとするような傾向を日本の近代教育は続けてきた、ということが言えると思います。アジアの侵略において、実際は挫折して日本に帰ったにも関わらず、それを勝利の歴史として、明治以降の日本が受け継ぐべき勝利の歴史として、これを回想しようとしてきたのであると言えるのでないか。

しかし、我々は、今はっきり言えることは、この二つ、「文禄・慶長の役」と日本の近代・明治以降におけるアジア侵略とともに失敗したものである、歴史的な失敗である、と我々は振り返ってみながら、実はこれは「アジアの悲劇」であったと思わざるをえないわけです。

今、東アジアにおいて、日本に対して反日的な傾向があるということは、実は、歴史的に言えば、この二つの事件、アジアの侵略が重なって、日本への批判として、アジア日本へのある種の潜在意識的な恨みとして、残っていると思っているわけです。

これが実は、アジアのなかに共通意識として、潜在意識的な形の中で残っているということを申し上げておいてですね、これから序論の第二のところを申し上げたいのです。

それは、ドイツのランケ史学について触れてみたいと思います。良く言われるように、ドイツのランケは、近代史学の父であると言われた訳ですけれども、彼は1795年に生まれ1886年に亡くなったのですが、日本語に翻訳された本のなかに『世界史概観』という本があります。これは、原題は『近代史の諸時代について』と言います。（中略）

この本が出たのはアヘン戦争の12年後です。これを念頭に置いていただいて、彼の根本的な歴史観というのはどういうものであったかという問題でありますが、彼はこういうこと言っています。

「この地球上において、若干の民族は他の民族に優越する勢力を賦与せられ、これら若干民族がもっぱら他の民族に対して影響を与えている。だから大きな国があって、その大きな国が他の小さな国々に影響を与えている。それゆえにわれわれの目標は……歴史においてずばぬけた活動を示した諸民族そのものにむけなければならない」。

世界史は強大な国の歴史であると言っているわけです。非常に国家主義的史観がここに流れている訳です。

これが、日本にとってどういうことになるかといいますと、次の言葉です。

「私は私のフランス史の中に、偉大なる征服者とは同時に文化の伝搬者たる人であると言ったが、実にシーザーの卓越していたのはこの点においてであった」。

いわば、征服した民族が、征服しながら文化を伝えるから、だから、征服したことよりも文化を伝えたことが実に偉大ではないか、と言ったような発言をしている訳です。

そこではゲルマン人を賞賛しているのですが、「ゲルマン社会には主従制度があり、ローマ人の間にもあったのだけれども、ローマは実力者によって追い出されていったので、この制度が形だけ残った、形骸化して血の通ったものになることはなかった」と言っているわけです。そして「それが、残っている、その制度が生き生きとして残っているのが、ゲルマン民族においてであり、ゲルマン人においては、この一切を貫く忠誠の絆こそ、太古からの王制と独特な軍隊組織を通して、その近代史の全部を特徴づけたのである」。

これは、アジアで言えば、日本における主従制度でしょうね。一番封建的な制度が続いたのですから。だから、日本の近代史学というのは、このドイツ歴史学の祖と言われるランケをそのまま引用してきたというものは、当然あり得ることでしょうね。これは、広辞苑に書かれていることでありますが、「その学風は門弟リースを通じて日本にも及び、アカデミズム史学を基礎づけた。」

だから、日本の歴史学は、ランケからリースへと、そして日本へと続いて来たものであると言っているわけですね。そして、このランケが『世界史概観』のなかでアジア史をどうみているか、一箇所だけ引用してみたいと思います。

「例えば、アジアに目を向けてみよう。我々はそこに文化が発生したこと、まだこの大陸がいくつかの文化団体を持っていたということを知っている。（略）。歴史の動きは全体としてむしろ退行的であった」。

歴史の動きは前進しないで、退いていったのであると。ヨーロッパの重要な思想の中にあるアジア史は退行的であった、あるいは、停滞してきたという考え方ですね。

「アジア文化においては、最古の時期がかえって全盛期であって、ギリシャ的要素やローマ的要素の盛期にあたる第二、第三の時期には、すでにそれは大したものではなくなっていた。そして蛮族・蒙古族の侵略とともに、アジアの文化はまったく終末を告げたのである」。

蒙古族侵略と同時に、アジア史は終末を迎えた、これが西欧人のアジア史の見方であったと言わざるを得ないですね。未開時代に立ち返ったというのがアジアの歴史であると。

「当時の東洋に瀰漫していた野蛮は、現今においてもなお支配をつづけている」。

また、今日においても蒙古によって支配された野蛮が続いている、これがアジアだというように説明しているわけです。

私は、日本の方にはすまないのですが、日本の近代化は、この歴史観に同調したものである。日本は西欧の文明を受け入れたがために、文明国であり、アジアは野蛮である、これが文明国における日本のアジア史観であったと思わざるを得ないのです。これに対して、現代的な解釈を置き加えたいと思いますが、女性の哲学者でハンナ・アレントという人がいます。アレントが『全体主義の起源』という有名な本を出しています。この本でアレントはこういうことを言います。世界の帝国主義を、いわば、スペインやイギリスを中心としての帝国主義を第一次帝国主義、と彼女は考え、それから、今度はドイツやイタリア、それに

学んだ日本を中心とした帝国主義を第二次帝国主義と言います。だが、第一次帝国主義と第二次帝国主義のなかで重要な相違は何かと申しますと、第一次帝国主義は未開の国、アフリカの国へ行った。だが、第二次帝国主義国家は、同じ地域の文明国に入って行った。ドイツはヨーロッパを支配しようとした、日本はアジアを支配しようとした。

しかし、アジアは伝統的な文明を持っている国であるのにもかかわらず、それを野蛮と見なしてアジアのなかに入っていったと考える事ができるわけです。（ここで、詳しいことは申し述べませんですけれども、そういった帝国主義に対する解釈があるということを申し述べて、残りはどうぞ本を読んでいただきたいと思うわけです）

第二の項目に入りまして、今までの東アジアの歴史を、私は、東アジアの不在の歴史だと申し上げたいと思います。これをテーマにこれからお話申し上げたいと思います。

1919年の韓国の（朝鮮の）３ .1独立宣言というのがありますが、そのなかで、それを書いた人は崔南善というわずか当時29歳の人でありますけども、そのなかに次のような言葉があります。

「朝鮮を武力でもって威力で支配することは決して東洋の永久平和にはならない」東洋の安危の主軸である４億中国人のなかに日本に対する危惧があるとすれば、これは決して東洋平和ではない、ということを言っているのです。

それは、東洋全体が共に倒れ、共に滅ぶ悲運の道である。それに見舞われることは迷惑であると。

「今日吾人の朝鮮独立は、朝鮮人をして正当な繁栄を遂げしめると同時に、日本をして邪見から出て東洋支持者としての重責を全うせしめることであり……」

だから、今は、独立運動はするけども、それは単に朝鮮の為のみではないのだ、東洋全体の支持者として日本が立つことを願うのであるということを言っている。

そして、同時にそれは「中国をして夢にも免れえなかった不安恐怖から脱出し得るようにすることであり、また東洋平和をその重要な一部とする世界平和、人類幸福に必要な段階となさしめることである。これがどうして区々たる感情上の問題であろうか」

これは、単に日本に対する感情の問題ではない。東洋が生きるためには、中国から日本に対する恐怖心が無くなり、中国と朝鮮と日本が共に、世界平和、人類後継に貢献に道しかないのだ、これが我々が行くべき道であると示しているのであります。

私はしばしばこういうことを考えるのですね、私の哲学の一つですが「支配者の言葉よりも、支配され、虐待されている人々の言葉のほうが真理に近いではないのか」。こういう思いを私はしているのであります。いわば、こう言って良いと思います。

３ .1独立宣言の中には、近代におけるアジアの不在を嘆いている。日本がアジアを支配することによってアジアが不在になるのだ。それが、普遍的思想になるわけですね。

（テープ交換のため一部略）

日本周辺諸国の韓国、中国の人々は西洋を勉強しようとするが、西洋は日本に比べて遥かに遠いわけですから、日本に行って、日本が受け入れた西洋を勉強するわけです。

しかし、日本に行った多くの学生は、日本の古事記や日本書紀を勉強した人はほとんどいない。ただ勉強したわずかな人はいるのですが、皆親日家になる。

しかし、今では日本へ行って古事記や日本書紀を勉強するし、日本のあらゆるものを勉強するという人がいる。この現象は以前とは非常に違う時代になってきたことを思わざるを得ない。

こういう近代以前の姿がどういう風であったか、もう一度振り返ってみますとですね、皆が近代以前において、中国を学ぼうとする。だから、例えば、中国においての日本とか朝鮮に関することはほとんど関心がない。朝鮮においては徳川時代に日本に通信使を送っていますけれども、アジアにおいて、文明の中心である中国に対する関心はあっても、朝鮮に対する関心はない。また、中国においては日本に対する関心がない。いわば、日本における朝鮮の不在、アジアにおける朝鮮・日本不在の時代が続いて近代に入って行った、と言わざるを得ないわけですね。だから、ここで、明確に我々が考えられることは、一国主義的な時代においては、アジアは不在である、ということですね。

それから、今度はそれ以降の話をちょっと見ていこうと思いますが、日本における朝鮮不在について例えば申し上げますと、日本のいろんな政治家達が書いた本がありますけれども、そのなかに「唐」という言葉が出ますね。「唐」という場合には、それは東部を指したり、中国を指すわけです。それで、朝鮮も指す場合にも「唐」というのです。それは、朝鮮というのは、彼らの眼中

には不在であった、ということがわかるわけですね。

私がここで申し上げたいのは、アジアにおいて弱い国は不在であるのではない。我々は、弱い国に対する痛みを感じるアジアにならなければならない。弱い国がどうすれば我々と同じように栄えて、同じように文明を交換し合えるような状態に入るか、ということを我々は考えなければいけない。かつては、弱い国を切り捨てた。しかし、今日においては、弱い国を含み込むための時代、そういうアジアを見せていきたい、と我々は思わざるをえないと思います。

今申しましたように、日本は中国を中心として近代以前の時代を考えたわけですが、それに関してプリンストン大学の日本学教授であってマリウス・ジャンセンが書いた『日本二百年の変貌』の中に、「それ朝鮮・琉球の属の如き、中華を去ることははなはだ遠からず」。だから、これは朝鮮や琉球というのは、中国を知ればそれを知る事であって、特別に朝鮮や琉球を知ろうとする必要はないのだ。「その書もまた同文なり」で、書いている文章も中国と同じである、だから見本として中国を考えればいいのであって、朝鮮や琉球を考える必要がないという日本の姿勢が、書かれています。

それが近代おいてどうなるかということに関して、やはりマリウス・ジャンセンの『日本と東アジアの隣人‐過去から未来へ‐』という 1999年の本の中から引用します。

徳川時代に朝鮮の使節が、通信使として日本に行くわけですね、そうすると日本人はその通信使に会おうと思って皆集まってくるわけですね。それが近代になると、1876年以降、朝鮮の通信使が日本に到着すると、全然かつてとは違う、ということを書いている訳ですね。

「ほぼ３百年近く、平和な関係であった隣国（朝鮮）、そして文化と教養の高さで日本人を感銘させるようなエリートによって統治された隣国が、あれほど急に一転して日本人の怒りと軽蔑の対象と化して、それまでの敬意が吹っ飛んでしまったのは一見驚くべきである」「徳川幕府の時代に中国の文化を持ってくると思いながらも、朝鮮の使節に示していた敬意は、明治初期になると素早く捨てられてしまう」と言っている訳ですね。

それで、その当時の、1876年以降ですが、朝鮮通信使団が東京に到着するわけですが、その到着した時を目撃した外国のジャーナリストが記録した言葉の中に、「朝鮮の正装した使節一行の厳粛な市中行進は、見物人の野次と嘲りの対象となり、おそらく厳風堂々の極致を示そうと用意したはずの装束や持ち物も、物見高い人だかりと彼等の嘲笑を招くだけだった」。

だから、その以前と日本は中国や朝鮮の文化に対しての考えや考え方が全く違う。かっては向こうの使節がやってきて「威風堂々」と歩いていると、それに対して敬意を抱いたけども、今やそれに対して嘲りの言葉しかない、こういうような時代に明治以降になって変わっていくということです。

これが近代日本におけるアジア観だったと我々は言わざるをえない。だから、私は、このアジア不在の歴史が続いたのだと言わざるをえないのですね。そして、遺憾ながら、戦後においても、日本において東アジア不在の歴史は続いたのである。

それは何故かというと、アジア全体において、アジア不在だったのですね。日本とアメリカの関係だけは存在する。韓国だって、韓国とアメリカだけの関係が存在する。中国の関係も存在しない、日本の関係も存在しないという時代を我々は経験しているわけですが、私は、1965年 12月に初めて日本を訪問して日本旅行をしたんですが、そして私も実は、1965年に日本に来て、初めて日本を発見した。1945年の一年間は、日本人と共に学校で日本を教えたりしたにもかかわらず、私の中では日本は不在であった。それで、ようやく、日本に来て初めて日本を発見した経験をします。

そして、同志社大学で話したのですけれども、同志社の学生達が「日本はアジアについて考えてはならない、過去のように罪を起こすからだ」と言うのですよ。

それで、私は何と言ったかというと「私はアメリカ、ヨーロッパを通って、東南アジアを経て日本に来たけれども、バンコクで、1965年頃、空港に降りて一番大きな広告は何なのか知っているのか？ それは味の素だ。これをどうするつもりなのか」と。

「もう既に日本はアジアに存在している。だから我々は、日本と共にアジアを真剣に考えなければならない。これが現実だから。これが現実であり、ここから出発して未来のアジアが展開されるのだから、我々は真剣にアジアを考えなければならない」

「それを日本の若い人たちに対して大いに説かなくてはならない」と言った記憶があります。東アジアの発見と言いましょうか。不在になれば、我々の意識から、ある一国に対してですね、不在になる。ある一国のことを知らない、関心を持たない。そうすることで、ある意味では、ある一国に対しては敵意を持つ。敵意を持つ故にある一国とは関係をしないということなるとすれば、必ず、さっき申しましたネメシスが起こる。我々が日本を排除して日本を考えない、そして日本との関係を真剣に考えない。そうすると、必ず復讐が起こる、ネメシスが起こる。歴史のなかにおいてネメシスが起こる。こういうように我々が考え

るべきではないか、と私は思うのです。

そういう意味において、お互いが、東アジア発見の時代、これから東アジア発見の時代ですが、これからアジア三国がいかに生きるかを、過去を問うのではなくて、未来のために我々は考えなければならないと思うのです。

このごろ、東アジアの関係がいろいろ大変だという話をしますけれども、あまり心配しないほうがいい。なぜならば、もう既に、毎日一万人の普通の市民が往来する時代ではない。だから、歴史教科書の問題が、アジアの関係全体を支配することはできないのだ。段々とそれは後ろのほうに下がってしまうのである。心配する必要はない。だから、私はあえて申します。

政治によって支配される時代から、いかにすれば市民によって支配される東アジアを我々が作っていくか。これが我々の課題でなかろうかと思うのです。

次に、３番目の項の東アジアの現在をどう見るべきかについて４つくらいのお話をし、未来への問題提起をして、共に東アジアのことを考えていきたいと思います。

戦後の歴史を考えると同時に、我々は戦前の歴史を考えることから、軍事力即国力と考えた。だから、軍隊を持っていないと国力がない、軍隊を持つことがその国の国力である。これは中国もそうであるし、韓国も、北朝鮮もそうである。これは戦争の経験から当然な発想である。あるいは、冷戦体制のなかにおいて、いわば、戦後的政治状況からいって、これは当然だったかもしれない。

しかし、日本の考えとは何であったか。日本の繁栄というのは、その武力を持つことによっての繁栄ではなくて、武力を持たない繁栄であったということを我々は考える必要がある。これは、東アジア全体において、これから考えざるをえないと思います。韓国も中国も、この強力な軍事力を持つ事が力である、こういう考え方になっていったのですが、日本だけが例外で、軍事力を即国力とは思わないで、軍事力を持たないで国が繁栄できることを証明したわけです。だから、ようやく韓国も中国も、軍事力だけが国力ではなくて、1970年代から日本に学ぼうとする。軍事力以外の経済力とか知的力とか、こういうものが真の国力だということを学べと言っている。

こういうような時に、日本がアジアに向かって何を言うべきか。それが課題である。日本は軍事力を持たないで国力を築き上げた、このモデルをアジアに見てほしい、というような日本人になったほうが良いのではないか。アジアの軍事力があるから、我々の軍事力を強大にしてしまおうとしてしまうとすることが、果たして次の時代のアジアの為であるのか。こういうことを考えてほしいということをまず申し上げたいと思います。

次に、東アジアにおける新しい力学的関係とはどういうものかという問題ですが、私が今までずっと話したことは近代まで、いわゆる1945年以前においての状況を説明したわけですが、私は、21世紀に入って、我々は新しい東アジアの力学関係に対する歴史的経験を持ち始めたということを申し上げたいのです。

これはどういうことかと申し上げますと、以前は東アジアにおいて中国が覇権も持ちました。近代に入って、日本の覇権の時代がやってきましたわけですね。中国、日本の覇権が終わって、これからどうなるのだろうか。これが、東アジアにおいて再び中国覇権を持つという時代になるのか。それを我々が目指すべきか。日本はそれに向かって、日本が覇権を持つ時代に向かうべきか。どうするべきか。どういうような思考をすべきか。

私は、こういうことは、東アジアの、中・日・韓において初めての歴史的経験だと思うのです。どこが従属する形ではなくて、３つが同じく近代的発展をしながら、これからどのような関係を持つか。これが新しい歴史的経験であると私は思うのであります。

この新しい歴史的経験を生きる道は、あまり具体的なことは、私は分からないのですが、良く言われることは、競争しながら協力する。これしか我々の行く道はないのだと思うのです。あえて、私は韓国側に立って、一言申すわけですが、韓国や朝鮮の役割は何かと。

本当はこういう役割であってほしい。日中の間に立って、中日の間に立って、これを和解させ協力させる仲立ち役、媒介役ができないものか。こうすることによって、アジアに新しい連携の時代をもたらす、これが、アジアが行くべき道ではないだろうかと思うのであります。

それでは３番目に入りまして、東アジアの政治的リーダーシップの問題をお話申し上げしたいと思います。

この頃、日本では右寄りの政治的リーダーシップが大変問題になっているのですが、私は、これは駄目だというふうに申し上げたいと思います。

戦後においてですね、東アジア全体において、日本の存在が非常に重要であるということを、私はまず申し上げたいと思います。まるでヨーロッパにおいて戦争をしかけたドイツの役割が非常に重要である様に、日本の役割が非常に重要であると、申し上げたいと思います。

だが、今の日本の指導力に対して懸念を持っている。それは日本が、アジアの中において、アジアに関わってきたことに対する思想が、日本に欠けている。

日本がヨーロッパにおけるドイツのような出発ができなかったことは、私は十分理解している。それはどういうことかというと、日本のなかにも問題はありますけれども、戦後においてドイツは分断された。しかしそういう不幸な状態において、非常に健全な周辺国というのが存在する。だから、これとの関係をどうするかを考えなければならないのですが、戦後において、日本は新しい現代の方向へ進んでいるけれども、遺憾ながら中国は長いこと内乱であった、朝鮮は南北が分裂していた。だから、日本の立場から見ると、アジアと協力しようと思っても協力できる状況ではないのだということが言える。これは、十分理解してですね、だから、今からの日本のあり方は重要だというわけです。

なぜならば、韓国もそれなりに非常な発展を遂げて、中国はますます発展を遂げようという状態、こういう時に日本はどうあるべきかを考え直さなければならないと思うのであります。

だから、戦後の日本にとっては、ドイツにとってのフランスやイギリスのような存在はアジアにはなかった。そして、今は、韓国も中国も変わっていく中において日本のリーダーシップがそれでいいのか。日本のリーダーシップは戦後、かえって後ろ向きになっているのではないか。だから、アジアにおいて一国のリーダーシップはあっても、アジア全体の為のリーダーシップは存在しない。これが、現在の状況であるというふうに申し上げたいと思います。

最後の問題になりまして、私は、民主的な国民に期待するということを申し上げたいと思います。

私は民間の立場で、民間の若い人達のために政府と政府の間で大分努力してきました。そして、今日韓国に年間 260万人の日本人がやってくるわけですけれども、そして韓国から日本へ行っているのは１７０万人くらいですね。この頃、韓国は中国ブームで、中国へ行っているのは４００万近くも行っています。何も私はそれに対して日本が少なくて中国が多いと言っているのではなく、中国が広いから当然多いはずだと、私は言っているのですけれども、そういうふうに時代が変わっている。

にもかかわらず、政府間のことをやろうとしても教科書問題のためにそれが壊れてしまう。また、ある政治的指導者になると考えが違ってきてしまう。それでは、日韓関係ができないんです。

こういうことを経験しまして、今、積極的に申し上げるのは、市民の行動の時代に入る。政治家達の、あるいは政治勢力がやっていることに協力することはするけれども、政治的に対立したからといって、我々市民の行動をやめてはならない。政治家が対立すればするほど、我々は市民の行動を展開しなければならない。そして、いつかは、ヨーロッパにおいてそうであるがごとく、我々市民が、東アジアの共同圏の問題を作っていくという時代を作らなければならない。そうでないと、いつも政治家を待っていて、我々が黙っていて、政治家の発言によって我々が左右されて、といったことになる。こういう時代はもう終わらせたい。これが、私が長いこと日韓関係をしてきて思うことです。

それで、最後に一番私が申し上げたいことは、民主的国民への期待、市民への期待、ということを申し上げたいと思います。

長い不幸な時代を超えて、これからはやはり市民が新しい歴史を作っていくべきだと思うのです。それで、私は韓国の金大中前大統領と日本の小渕恵三元総理 が交流した時に、いろいろ関係しまして、２人の交流でこれから日韓問題はみんな解決すると思ったのです。ところが、次の時代になると、それがどうもうまく行かない。そんな政治家にいつまで我々は引っ張られていいのかなと、悔しい思いをしまして、それから市民観を盛んに言うようになりました。

1998年の 10月 8日、当時の小渕日本総理と韓国の金大中大統領との間で交わされた日韓共同宣言ですね、あれは今でも読んでみましても、アジアの将来をそのまま声明している立派なものですが、今それは死語となって顧みない文章になってしまいまして、私はこれが非常に惜しいと思うのであります。

それで、日本と韓国は経済的にどんどん発展していってですね、今は日本と韓国の間の経済交易は、年間 720億ドルを超え

ていますね。韓国は日本に対して、赤字が年間244億ドルになる。しかし、韓国は前のようにそれほど問題にしていない。それは、非常に恐縮な話でありますが、中国に対して韓国は905億ドルの交易をしているわけですが、それで韓国側のほうが133億ドルの黒字がある。しかし、グローバルに考えてこれは大した問題ではないというような意味において、韓中関係、中韓関係が続いているわけであります。

こういうような時代、経済そのものも政治の思惑と関係なしにどんどん発展して、それで世界のなかにおいても最もダイナミックな地域になっているということを考えながら、私は、これはひとつの過渡期だと思ってですね、こういう経済的な関係と人為的な交流に対して政治は立ち遅れているのだという立場に私は立って、各国の問題を考えているのです。

だから、我々は、市民が政治に影響する時代をどんどん作っていかなければならない、こういった意味において、民衆、民主主義の成熟の時代を我々は作らなければならないと思っています。それで、そういうような政治も、いつか私はついてくると思うのですね。こういう民間の間の強力な、差し止めることのできない強力な動き、韓国と中国の間でも実際行き来しているような動き、交流、これは誰も差し止めることが出来ない。これが政治を動かすような時代になるのだと、我々は思わなければならない。

そういった意味で、最後の言葉として、こういうような日本語の教師達が集まって、お互い向上しあっているというのは、まさにそういう時代を作るようなささやかな努力である。だから、これが実り大きいものになって、交流がどんどん広がって、そして東アジアに新しい協力関係を生み出すという、これが我々の目指すべきことではないか。

過去の事を問うのではなくて、未来を目指して我々は進みましょう、というようなことを申し上げて終わりたいと思います。

池先生の講演内容についての生徒学生への補足説明（井嶋）

［以下の文章は、池先生のお話の後その場で、学生の日本語理解を定着するために講演の要点を補足的に行った時のものである。尚、この内容については、池先生に内容に相違がないか確認した。］

池明観先生がおっしゃいたかったことを確認します。参考にしてください。

まずレジメに、一、序のところ。

ここで池明観先生がおっしゃいたかったことは、日本を含めてアジア、広く言えば東洋は、西洋の考え方に従って自分の生き方を考えて来たのではないか、と理解してください。

あなた方は教科書でどういうふうに勉強しているかは詳しく知りませんが、第二次世界大戦という言葉がありますけれども、これは日本で良識のある大人はこの言葉は使わないですね。ある人は太平洋戦争といいます、ある人は36年戦争といいます。そのような考え方から、先生は韓国の立場、韓国人として、日本の36年間の侵略の歴史というものに立って、先生の意見を言われました。しかし、そのところだけを採り上げるのではなく、それ以前からの日本と朝鮮の歴史の中にあった友好関係も先生は大事にしながら優しさをもって話されました。しかし結局は日本に対して非常に厳しい意見を発言されたということを分かってほしいです。

それを出発点として、次に東アジアの不在の歴史と書いてあります。

不在ということは「居ない」ということですね。アジアも、東アジアも、南アジアも西アジアも、皆違いますよね。アジアに深い歴史があるにもかかわらず、東アジアというものの存在が非常に薄い、無かった、という発言がありました。そのことへの説明を、先生は韓国の立場で、そしてここ中国の立場も理解して発言されました。ですから、ここに集う日本人は、先生の発言をかなり厳しく聞いていたはずです。

中国の学生、韓国の学生が日本に来て、学んだときなどしばしば言いますが「え？私が自分の国で勉強した歴史と全然違うことをやっている」と。

では、何が違うか、そういうことが大事なことですが、そういうこともあなた方の勉強のなかで思い出しながら、この池明観先生の言葉を思いだしていただければ嬉しいです。

それから最後、東アジアの現在をどう見るべきかと書いてあります。ここでは、いかに日本がこれから責任を持ったリーダーシップをとらなければいけないかが主題です。

それにしては、日本は何かおかしいんじゃないかですかということを発言されました。

この辺があなた方高校生、大学生にとって非常に大事なことなのです。あなた方は将来を作っていく人ですから。且つ、日本語を勉強している人、あるいは日本に関心を持っている人ですから。

池明観先生が最後に言われましたね、日本語の先生達の場所でこの発言ができることをとても嬉しく思うと。これを若い人たちは自分のことに置き換えてほしいのです。

そこから池明観先生の言葉を、あなたがた10代、20代の人たちはどう受け止めるのか。そして、10年後、20年後にあなた方はこのような会議の場等で必ず発言することがでてくると思います。あるいは、経済等いろいろな仕事をすることになると思います。

そこで、是非今日、2006年7月25日、南太平洋で発生した台風が近づく中「ああ、あの時、池明観先生が言ったことはこうだったなぁ」ということを思い出してほしいと思います。

今日開会式の時、雨が降っていました。今晴れて来ました。私は、天は見ているなと最近つくづく思いますが、池明観先生のお話と共に天から光が差して来ました。これを大事にしたいと思います。

池 明観先生、若者に一言、との中国の先生からの要望に応えて

私はあんまり世論に惑わされないほうが良いと思います。政治的衝突が起こるとか、いろんな問題が起こると、我々は「この国はダメだ」とか考えるでしょう。そういうふうに考えないでね、人間が交わるということは常に問題が起こるわけですよ。だから我々が日本と交わっていなければ、日本と問題が起こらないんですよ。だから、常に国が集まってくるということは問題が起こるということだと。

そして、その問題をどう解決するのか。平和的に解決するのか、そうでなければ文章のほうに持っていくのか。こういうことを考えなければ。

我々は平和的に解決してほしい。人間関係とはそういうものだと。あんまり問題が起こったことに惑わされないように。問題が起こったけれども、それはしばらくすればまた退いてしまうだろうというようなおおらかな心をこれから若い人たちは持つ。そして、我々三国の間における友情をだんだん高めていく。

私は、絶対、この東アジアにおいて、不幸な時代は起こらないと思います。ますます良い時代になって行くと思います。基本的に東アジアの歴史はそういうふうに動くと思いますから。

中国だけが優位に立って支配するようなことはない、あるいは日本が優位に立って支配することはあり得ないんですよ。だから、そうすると、自分の国が発展しながら他者を眺めることのできる新しいリーダーシップ。だから私は言うんですよ、日本のリーダーシップは日本の国民だけを考えたらダメなんですよ。もうすでにアジアを考えなければならない。これくらいの指導者になってほしい。

だから皆さんはそうならないといけないんですよ。そうでないと、アジアは衝突して何になるんですか。ひとつも利益がないじゃないですか。こんなに今まで、歴史の経験の中でですね、衝突して不幸であり、多くの犠牲を払ったんですから、これからはそういう時代は作らない、これからは平和の時代だと。そこに向けての市民的な覚悟と参加。これがなければならない。

だから私は政治的問題の衝突が起こっても大したことないんです。我々がしっかりしていれば何にも起こらないんですよ。だから政治に支配される時代ではなくて、市民が欲することを政治がやらざる得ない時代を我々は作って行くんだというような意気込みで行きましょうと、私は皆さんに申し上げたいと思います。

池 明観氏　略歴

1924年生まれ。ソウル大学分理科大宗教学科卒業後、大学院で宗教哲学を専攻。

徳成女子大学、ソウル大学等で教鞭を取りつつ、雑誌『思想界』主幹など経て、1972年　来日。東京女子大学教授等を歴任し、帰国後、翰林大日本学研究所長として韓日の交流、とりわけ文化交流に多大な貢献をされ、著作も多く、現在、ご自身の集大成に取り組まれている。

尚、T・K生著「韓国からの通信－ 1972.11～ 1974.6－」（岩波新書）は、雑誌『世界』（岩波書店）に 1973年 5月から 1974年 6月まで掲載された、当時韓国で戒厳令下にあって、民主化の願いを込めた通信であるが、後にこのT・K生は、池 明観氏であることが公表された。

東アジアでの日本語教育の現在と日本への期待・役割
― 日本における日本語教育者として ―

門脇　薫
［山口大学］

1.はじめに

○アジアでの日本語教育歴

台湾：1年2か月（台中YMCA日本語学校：一般成人）

タイ：2か月、中国：1か月、インド：2か月（AOTS海外事務所：渡日前研修）

韓国：3年半（在韓国日本大使館：教師研修、同徳女子大学校：大学生）

日本：約11年（AOTS：技術研修生、山口大学/大阪外国語大学：留学生）

○本日の話のポイント

日本語教育の概況、大学の日本語教育者としての現在の取り組み、今後の日本語教育について

2.日本語教育の概況

（1）日本語学習者

○学習者の多様化

日本国内：128,500人（アジア地域79.7%）（文化庁2004年の調査）

海外：2,356,745人（東アジア61%、東南アジア8.7%、南アジア0.6%）　【国際交流基金2003年の調査】

表1　対象学習者例

国内	海外（機関別）
留学生、就学生、技術研修生・技能実習生、ビジネス関係者、日系人・就労者、年少者、帰国子女、インターナショナルスクール在校生、中国帰国者、外国人配偶者、在日米軍関係学校在籍者等	学校教育：小学校、中学校、高校、大学 それ以外：民間の語学学校、公的機関や企業内の講座等

（2）日本語教育の動向

従来の日本国内における日本語教育：大学の留学生対象の日本語教育中心

→年少者、地域在住の外国人対象の日本語支援が活発化

日本語教師も多様化

3.留学生政策

○量から質へ

1980年代～　「留学生受け入れ10万人計画」

大学に日本語教師養成課程、留学生センター設立

1998年51,298人→2003年109,508人（アジアからの留学生が90%）

○留学生交流の意義

①諸外国との相互理解の増進と人的ネットワークの形成

②国際社会に対する知的貢献

③国際的な視野を持った日本人学生の育成と開かれた活力ある社会の実現

④我が国の大学等の国際化、国際競争力の強化

【中央教育審議会2003】

従来は①②が中心→③④のような日本の大学の成長にプラスになるという視点が加わる。

○受け入れ・派遣の不均衡

対象国・地域：受け入れはアジアが大部分、派遣の多くが欧米諸国へ

人　　数：受け入れ留学生数 ＞ 日本人学生の海外派遣人数

今後海外留学派遣に力を入れる。

4.大学の日本語教育者としての取り組み

（1）山口大学国際センター

2002年　留学生センター設立

2004年　国立大学法人化により国際センターに改組

留学生数　約300名（中国約160名、韓国約30名、マレーシア約20名、バングラデシュ約20名）

（2）大学の国際センターにおける日本語教育者としての役割

留学生対象の日本語教育　＋　大学の国際化のための業務

○学内・地域における留学生交流

国際センター行事に交流ボランティア学生参加

地域の行事や学校に留学生を派遣　例）小中学校での「総合学習」

○一般学生対象の共通教育の講義「世界を見る・聞く・知る」（韓国・中国担当）

前期、後期開講、全学部学生対象、受講生約150名（留学生も数名受講）

第１回　韓国・中国クイズ、韓国概説、韓国滞在体験談

第２回　中国概説、体験談、NHK「クローズアップ現代　中国の若者と反日感情」視聴

第３回　韓国・中国との交流について：国際センターのプログラム紹介、ゲストスピーカーの韓国人・中国人留学生によるスピーチ

＜授業後の学生のコメント＞

韓国・中国について無知で恥ずかしい。授業を通して両国に対する誤った認識が是正された。イメージもよくなった。韓国・中国に行ってみたい。留学してみたい。韓国人・中国人留学生のスピーチに感動した。外国語である日本語で自国や日本について意見が言えるのはすばらしい。日本に来て積極的に吸収しようとしている留学生の姿勢が刺激になった。まずは学内にいる留学生と話をしてみたい。韓国・中国について言葉や文化をもっと勉強する。とにかく行動してみる。先生が行っている国際交流やこのような授業は非常に大切な役割を果たしていると思う。

○海外の協定大学への語学研修派遣プログラム（筆者：中国山東大学担当）

2005年8月　10名中国語研修に参加

○韓国と中国の協定大学との学生交流プログラム（筆者：コーディネーター）

「山口大学・韓国 公州大学・中国 山東大学　3大学学生交流プログラム」

第１回　2004年12月17日～23日　第２回　2005年11月10日～17日

＜プログラム例＞（於　山口大学）

各国・大学紹介、日本語授業、共通教育の授業参加、工学部研究室訪問、市内見学、ホームステイ、広島見学、市内見学、意見交換会、日本文化体験、送別会兼交流会　等

→以上の取り組みにより、大学間における長期留学者の増加につながっている。

（3）留学生交流の意義

韓国、中国からの留学生との交流によって、日本人学生が刺激を受け海外、特に東アジア諸国・地域に関心を持つようになる。留学生から学ぶことが多い。

５.今後の日本語教育について

（１）日本語学習者のニーズ

①日本国内での就労機会を求めるニーズ（就学生・留学生含む）

②海外における言語文化多様性の保持をモットーとするニーズ　【西原 2005】

（２）海外の初等・中等教育における日本語教育研究の必要性

○海外の学習者の約 60%が初等・中等教育の学習者で、そこで指導を行う教師の多くが日本語非母語話者教師であるが、国内の日本語教育において海外の初等・中等教育や非母語話者教師に関する研究はあまり見られない。

→日本語非母語話者教師と母語話者教師による team teachingの考察　【門脇 2004,2005】

（３）日本における日本語教育の課題

○海外と国内の日本語教育関係者との「協働」

学習者だけではなく、日本語教育者の相互理解、相互交流

連携による研究、教材制作

○海外の日本語非母語話者教師、母語話者教師からの発信

○海外と国内の日本語教育の調整役としての日本の役割

○広義の「日本語教育」を行う日本語教育者の養成

[参考文献]

門脇薫（2004）……「オーストラリアの高校における日本語母語話者アシスタント教師の役割」
『山口大学留学生センター紀要』第２号　山口大学留学生センター

門脇薫（2005）……「韓国の高校における第２外国語としての日本語教育 日本語母語話者教師との授業の可能性」
平成１７年度日本語教育学会第１回研究 集会レジュメ

国際交流基金（2005）……『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003年』国際交流基金

中央教育審議会（2003）……『新たな留学生政策の展開について（中間報告）』中央教育審議会

西原鈴子（2005）……「戦略的『日本語教育』構想」『月刊　言語』6月号　大修館書店

二宮皓（2003）……『21世紀の留学生戦略 -21の提言 』留学生施策の戦略的方策に関する研究

[最終報告書]

山口大学国際センター（2005）『山口大学・韓国 公州大学・中国 山東大学　3大学交流報告書』山口大学国際センター

文化庁「日本語教育実態調査」 http://www.bunka.go.jp

門脇 薫　kkaoru@yamaguchi-u.ac.jp

韓国での東アジア文化観と中等教育における日本語教育と共生

尹　世羅（ユン セラ）
［韓国・慶福女子情報産業高等学校］

１.はじめに

今回の発表に当たり、はじめてこの主題に接した時、この主題の意味の難しさというか、それ自体どういう意味なのか伝わって来なかった。今でも十分理解しているとはいえないだろう。主題の内容にどれくらい接近できるかわかりかねるが、私、一日本語教師として現場で感じた生徒たちの姿、その生徒たちが感じている日本、それに東アジアに対する考え、東アジア文化観をどう捉えているのか、それを現場の私たち教師はどのように感受し教育的観点から解釈していったらいいのか。

結局はこの国際化時代でわれわれの未来である彼ら生徒たちが東アジアに対するしっかりとした考えを持ち、共に手を取り合うことのできる、共生の関係として育んでいけるように導いていくのが私たちの使命ではないかと思う。

これを通して『日韓・アジア教育文化センター』の創立の目的である「日本・韓国・中国・台湾・インドの賛同者が連携して、国内外の児童生徒学生等若い世代及び主に教育関係者を対象に、日本語教育・日本の文化を糸口にして、教育と文化に関わるアジアでの国際交流・国際貢献事業を行い、国際化時代での教育の現状を再検討し教育の活性化を指向すると同時に、日本及び広くはアジア各国・各地域の文化の再認識、再発見と相互啓発に寄与すること」を達成させるために寄与できると思う。

２.韓国での東アジア文化観

（１）歴史を通してみた韓国と東アジア

東アジア地域は歴史的に長い年月にわたって互いに隣接してきた地域で、特に文化的には中国文化圏、漢字文化圏、または儒教文化圏と呼ばれた地域である。古代にはかなり緊密で友好的な関係であったが、時代を経てからは状況が変わり互いの関係が遠のいてしまった。

１）近世以前

- 接触機会の僅少 ― 地理的に大海を挟み隔てていて、互いの往来が難しかった。それに各国の鎖国政策の影響で、過去の数世紀の間、東アジアは人的・物的な交流がほとんど無かったと言える。
- 生活上の違い ― 気候や地理的要素の違いだけではなく、長い間の鎖国と断絶の結果、大きく異なり、互いの事情や生活などへの知識も関心を持つこともなかった。
- 共通語の欠如 ― 漢字の使用は共通であったにもかかわらず、意思疎通の言語ではなかった。

２）近代に入って

- 相互関心の希少 ― 相変わらず、相互間の無関心と軽視、葛藤と衝突が続いた。
- 西欧指向性 ― 西欧の文物にたいした指向

３）世界大戦の後

- 理念の差 ― 自由と共産主義
- ひとつの文化圏・経済圏として成立できない要因 ― 漢字の変形（または使わない）、査証（ＶＩＳＡ）の制限、年度を表す方法の違い

（２）相互の文化交流

東アジアの国々は地理的にとても近いし、歴史的にも、文化的にも共通点が多い。だが実際的には多角的な交流はあまりにも少なかったと思う。その理由は様々考えられるが、まず第一に挙げられるには言語の問題ではないか。もちろん漢字漢文が千年以上の歴史の中で互いに使われてきたが、漢字漢文が異なる形で伝達されてそれだけで意思疎通はできない。文化交流のためには隣国の言葉を学ぶ必要がある。それで各国が互いの言語を尊重し研究し教育に結びつけていくことが大切である。今、韓国では日本語と中国語の学習者が多くなり、日本と中国でも韓流ブームの影響で韓国語の学習者が多くなったと聞いている。いい現象だと思う。

西欧諸国、特にヨーロッパ（ＥＵ）に比べ東アジアの文化交流はまだ不十分である。したがって、これから東アジアの文化を

もっと相互交流させて、各国の国民たちが異なる感情を理解し合い、共通の文化圏として感じられるようになればいいと思う。

（３）生徒たちの東アジア文化観（日本文化観を中心として）

新学期の最初の日本語の授業時間に生徒たちに『日本から何を思い浮かべますか？』と訊ねてみた。私が担当している 8クラスの生徒 280人対象にして、自由な雰囲気の中で話し合わせた。そのとき出たのは、次のものだった。「着物・制服・漫画・アニメ・地震・侍・芸者・混浴・小泉総理・天皇・獨島問題」等である。最近はインターネットや衛星放送など、さまざまな媒体の発展の影響でかなり近くなり、関心も深くなった。そのため既成世代よりは眺めている視線もずっと肯定的になったのも事実である。

だが、基本的な感情面では「なんとなく嫌だ」という生徒たちの雰囲気である。それは中国に対しても同じであった（最近訊ねたことがある）。意識の底で自然に生じる拒否感というものなのか。それを今の若い生徒ですら持っているのだ。それで日本語の教師として自分の役割が大きいと思う。

３.日本語教育の方向

外国、またその国の人、社会、文化を理解するためには、その国の言葉を知ることが大事である。生徒たちは日本語、または日本に対して知識が増えれば増えるほど、正しい視角で日本を見ることができるはずである。教師は生徒に知識を伝え授ける者であり、教え授ける者である。生徒に正しい知識を伝え授けてて、その知識が基本になって生徒の考え方や新たな視覚を目覚めさせる大事な使命が私たちにはある。まず、教師自ら正しい知識、文化観を身につけるように絶えず努力が必要であるのだ。好きだの嫌いだのという白黒の論理ではなく、ただ違うのだと認めて、正しいとか正しくないとか生徒自ら判断できるように手助けすべきである。

４.共生の道

この主題のめざすところは共生である。互いに助け合い、互いに必要な存在として共に生きていくことである。互いに存在するために、絶対離れられない関係になることである。未来の主役になる生徒たちが、過去のようににらみ合うような東アジアの姿ではないだろう。今回の学生交流プログラムのように各国の生徒が一緒になって共生の方法を自らが探し共生の模型を作り、それを国民レベルの社会に発展させていきたい。

今まで述べてきたことは個人的な経験と短絡的な考えから極めた一般的なことばかり並べたことに過ぎない。発表の価値としては恥ずかしく、つまらぬ意見になってしまったかもしれない。しかし、少なくても私自身は、教育者の行く道を日本語教師として行くべき方向と教育の方法についてもっと研究と努力を続けていくべきであるが、ある意味では糸口を探し出したような気がする。そういうことで日韓・アジア教育国際会議が持っている意義は大きいと思う。センターが追求している目的が実現できるように小さな力に過ぎないが、手伝えて行けたらいいと思う。私自身力量の不足で東アジア全般のことについてまでは及ばなかったことが残念でやまない気持ちもあるが、これをもって深く考えていく所存である。

◎参考図書：東アジア　問題と　視覚（Bak Young Seo外）
東アジアの伝統と変用（Ko Byung Yik著）

甘泉外国語中学の日本語教育 過去 現在 未来

陳 娅
［上海市甘泉外国語中学校］

１.回顧

当校は、1954年に、設立されました。創立者たちは、この学校が、清らかで甘い水を噴き出す泉のように、英才たちを社会に送り出すことを願って『甘泉』の名をつけました。

当校の**日本語教育**は、中日国交回復の 1972年に始まりました。日本語教育の実現と大きな関係があったのは、当時、甘泉中学にやってきた竹下健太という日本人教師でした。

以後、現在まで 34年間、上海で唯一の日本語を第一外国語とする、中、高一貫教育の全日制国立中学として続いてきました。しかし、この学校の歴史は長く苦しい戦いだったと言えるでしょう。日本語創設の頃は、日本語に対する反感も多く、なぜ、日本語教育なのか、子供たちになぜ、日本語を教えなければならないのかと、非難の声はあって理解者はあまりいませんでした。それに、長い間、日本語教科書もなく、教材もなく、日本語を教える教師も少なく、日本語を学ぼうという生徒も、なかなか集まらないこともありました。そんな中で、この長い間、歴代の校長たちは日本語教育の灯を絶やさず、努力と奮闘を続けてきました。今、考えてみると、それは素晴らしいことであり、敬服に値することだと思います。

現在、日本語教育は、この学校の特色として、上海だけでなく、中国国内でもよく知られています。特に、日本語教育のため、当校の校名は、2003年の 4月から、「甘泉中学」から「**甘泉外国語中学**」に、変更されました。名前を変え、外国語中学として特別の性格を政府から与えられることになり、外国語教育の視野も広がってきました。

２.日本語教育の現状とレベル

2006年度現在、甘泉外国語中学には、予備生（小学 6年生）、中学生（1～ 3年生）と、高校生（1～ 3年生）、全部で七学年、約 2100人の生徒が在校しています。外国語を中心にしているため、学校のクラス編成は、三つのパターンからなっています。

（１） 日本語を必修、英語を選択するクラス
（２） 英語を必修、日本語か韓国語かフランス語などを一つ選択するクラス
（３） 日本語と英語とともに必修するクラス

この中に、日本語を第一外国語とする生徒は約 950人、全部で 25クラスがあります。

今年の 7月まで、日本語教師は、日本人 5名、中国人 13名、全部で 18名でした。当校の教育の中で、34年間、一貫して通してきた方針があります。それは、日本語教育の核となる**日本人教師の招聘**を、毎年、続けてきたことです。それがこの学校の伝統となり、年々と日本語教育の質をアップしてきた大きな原因となっています。

生徒たちの日本語のレベルを、客観的に評価するために、日本の国際交流基金が行なう日本語能力試験に挑戦するように、学校は生徒たちにすすめています。中学卒業生は日本語能力試験３級以上にパス、高校卒業生はできれば２級以上にパスするように要求しています。甘泉外国語中学では、ここ数年、20名以上が、この 1級に合格しています。**「勉強には、目標を持て！」**、**「在学中に日本語能力試験１級をとれ！」**…日本語能力試験への挑戦は、今や、甘泉外国語中学の伝統となっています。

21世紀、わたしたちの生きている社会は、世界的な情報ネットワークの進展に伴い、世界がより身近で小さくなっています。そのため、中国を含める多くの国々は、国際理解教育を推進し始めました。この背景で、わが校は**「教養、個性、競争力、国際的視野を持つ現代人を育てる」**という教育方針を定め、生徒たちに国境を越え、国際的な感覚で異文化を理解し、生徒たちがより広い視野で問題を考えるように、教育するのを目的としています。

それに基づき、また全国の教育改革に応じ、2003年から日本語教育への改革を推進しました。

まず、日本語教育に対する理解を新たにすることです。教師たちは国際教育理念をもって、単に言語学を教えるという授業から、異文化への理解を深め、コミュニケーション能力を養うように変えなければなりません、。日本語教育の最終目標は、日本語の実用能力と国際社会で通用するコミュニケーション能力であることを認識してもらいます。それから、この新しい理念に沿って、日本語のカリキュラムの構成から授業の進め方まで一歩一歩と着実に改善しています。たとえば、教師からの一方的な授業でなく、生徒からの発言も多くある双方向的な授業、さらには生徒同士の発言で授業を進めていくように努力しています。

「理想と現実はいつも矛盾している」という言葉があります。確かに、まだ「受験地獄」である中国の現実においては、改革の推進は簡単なことではありません。どうしたらいいか、と困っていることもよくあります。

３.日本語教育の特色

◎日本の大学との留学提携

一つの特色は、当校は普通中学でありながら、高校卒業生たちが、日本の大学に留学するチャンスがある、と言うことです。日本の大学と提携が始まったのは、1995年からですが、現在は日本の４大学（龍谷大学、城西大学、立命館ＡＰＵ大学、追手門大学）と協定を結んでおり、年々の本校卒業生の留学者合計は、150人以上となっています。いずれも、無試験の推薦入学であり、奨学金、入学金免除、授業料一部免除など、生徒にとって有利な条件を取り付けており、生徒たちの留学が実現しやすくなっています。日本の大学を卒業して、続けて勉強しようと思って日本の大学院に進学する人も、日本で就職する人も、中国に戻って日本企業に就職する人もいます。いずれにしても、現在も将来も、彼らは日中交流の架け橋になっていると思ってもいいでしょう。

◎桜祭り

甘泉外国語中学の校内には、日本から寄贈された約60本の桜の樹があります。毎年、3月の末になると、桜がいっぺんに咲き、きれいな風景が展開されます。これらの美しい桜はもう中日友好のシンボルとなっているのではないかと思います。

中国の生徒に、日本の文化を体験させたいと考えて、2000年初めて「桜祭り」という名のイベントを行いました。その時は、日本語クラスの生徒たちは、満開の桜の木の下で、日本語の歌を歌ったり、舞踊を踊ったりして、とても楽しい一日を過ごしました。

学校の発展と、日本との交流が頻繁になるにつれて、桜祭りの形も内容も意味もより充実してきました。まず、日本語クラスの生徒ばかりでなく、英語クラスの生徒も留学生まで、学校全員を参加させ、期間も一日から、一週間にしました。それから、一週間にわたって、日本語、英語、中国語によるそれぞれのスピーチ大会、カラオケ大会、寸劇大会などのイベントが盛んに行われます。また、日本の伝統文化を紹介する講座、日本と提携関係のある大学、姉妹校である大阪勝山中学校、また上海日本人学校、さらに、在上海総領事館の方々に来ていただくのが恒例となりました。今年は、在上海総領事の講演会をしていただきました。

「桜祭りの」シンボルマーク、当校で作った祭り歌で賑やかに一週間を過ごします。生徒にとっては、自分を鍛え、新しいことに挑戦し、自分の日ごろの勉強の成果を見せるステージとなっています。学校側も、生徒たちに忘れがたい学生時代の思い出を与えることを、何よりも願っています。つまり、甘泉の桜祭りも30年あまり続いている日本語教育特色の文化結晶といえるでしょう。今や、この学校の文化祭として、**「教養、個性、競争力、国際的視野を持つ現代人を育てる」**という学校の目標のために、大きな役割を果たしています。これからも、生徒のために、続けていきたいと思います。

◎日本との友好交流

甘泉外国語中学の知名度が上がるにつれて、日本との交流は頻繁になってきました。毎年、日本からの高校生修学旅行団が、何組か訪れてきます。生徒たちとプレゼントの交換会をしたり，出し物の競演をしたり、グループに分かれて、市内見物の案内をしたり、生徒たちは交流のチャンスに恵まれて大張り切りです。

日本人学校との交流も親しく、教師同士の懇親会をしたり、互いの授業参観をしたり、両校のスピーチ大会には、それぞれの生徒代表が参加して日頃の勉強の成果を競います。

現在、グローバル化の国際社会の中で、中国は目覚ましい経済発展を続け、世界の注目を集めています。中国経済の中心である上海は人口が1780万人となり、そのうち、上海の長期滞在日本人は、5万人とも言われています。企業駐在員の子供たちが学ぶ日本人学校は、4，5年前の4倍の2400人となり、新校舎と浦東分校が増設されたそうです。こんな中で、中国、特に上海は日本との交流がさらに多くなるでしょう。そのために、当校は、精一杯、日本語教育を進め、教師の資質を高め、これからも、中国の中等日本語教育の研究の根拠地及び中日青少年たちの文化交流の舞台になるよう、力を尽くしていきたいと、願います。

甘泉外国語中学校留学生部の紹介

張　婷
［上海市甘泉外国語中学校］

本校は1954年に創立された中高一貫の公立学校で、現在52のクラス編成となっています。本校は30数年の日本語教育の歴史があり、国内外で知られています。2001年10月に上海市教育委員会の許可を得て、上海市でもっとも早く外国人留学生募集の資格「滬教委外（2001）53号」を取りました。本校は優れた文化伝統と日本語教育の特色を誇りとして「教育環境を整備し、外国との友好交流を図り、特長を生かして、より国際的な人材指導の道を求める」の理念に沿って、2003年3月24日に正式に留学生部を発足させました。

2006年度現在，留学生部の生徒数は61名で、うち日本籍、韓国籍と華僑の生徒はそれぞれ50名、5名、6名です。これらの生徒はみんな面接と筆記試験を経て二ヶ月間の仮入学を過ごしてはじめて本校の生徒となります。

教育課程として、本校は生徒たちの中国語レベルと年齢に応じて、中国クラス、基礎中国語クラスとHSKクラス「漢語水平試験」のいくつかのクラスパターンを手配しています。いま61人のうち22人の中学生は中国のクラスに入って中国の生徒と一緒に勉強しています。ほかの39人の生徒は基礎中国語クラスとHSKクラスに入り勉強しています。中国のクラスに入るというパターンは親たちにも歓迎されています。ほんの一部の韓国生徒を除く日本の生徒は大体2か国語外国語クラス「日本語と英語」で勉強しています。

HSKクラスは中国クラスと別に独自のクラス編成が組まれています。HSKクラスは15人以下の少人数クラスで中国語を主として教え、同時に高校の基礎授業にも力を入れています。数年来、留学生のHSKの成績は毎年合格率も高く、2005年と2006年の高校卒業生は全員大学入学試験に合格し、復旦大学に進学しました。今年、復旦大学は二人分の推薦入学の枠を本校に与えました。今後も毎年若干の枠が期待できます。

留学生の成長と教育のために、留学生部では数多くの基礎授業と選択授業を設けています。例えば、HSK試験の初級、中級、上級クラスと数学、物理、化学、英語，地理、生物などの基礎学科のほかに、生徒たちの要求に応じて書道、音楽、武術のような中国文化の授業もあります。そして、生徒たちの個性化にあった教育に応えるために、中国家庭のホームステー、修学旅行のような多彩な活動と個別指導なども実施しています。

本校には留学生専用の教室、宿舎と食堂があります。宿舎には専用の洗濯室、パソコンのネット配線、NHK衛星放送などの設備が整っています。宿舎は24時間のセキュリティー管理を行っています。また日本人の教師が中国の管理者と一緒に留学生の世話をしています。

留学生部は上海市教育委員会の関連条例「滬教委外（1999）60号」即ち中華人民共和国教育部令第4号「中小学外国生徒募集臨時方法」に基づいて管理されます。この管理条令は生活、勉学と賞罰の三つの部分からなっています。本校の留学生部は生徒の人間性を尊重する管理を行っています。また留学生の親代わりの相談相手になることを心がけています。毎月の「留学生部月報」は保護者たちにも歓迎されています。生徒たちの風紀指導についても親、保証人、担当教師と協力して生徒を導くように努力しています。

本校の留学生部の実状は上海市の関連会議でも紹介したことがあります。今後さらに経験に基づいて前進するようカリキュラムの整備、設備の充実などを努力したいと思っています。目下、留学生部の新三年計画を立て、日本の東京と韓国のソウルでも事務室を設け、発展を目指しています。

本校の留学生部の教育目標は次のとおりです。

1、健全な精神と健康な身体を持つ人材を育成する。

2、多文化を理解し、国際感覚を持つ人材を育てる。

3、3か国以上の言語を使える人間教育をする。

4、情報化社会に生き残る能力を持つ人を育てる。

将来はますます多文化が競合する生存競争の激しい社会です。本校はこのような社会で活躍できる競争力と能力と責任感を持つ国際的な人材の養成を目指して努力しています。

台湾における中等教育の日本語授業で見られる多文化の融合
― 台中女中第二外国語の学習者の発表実例から ―

李　金娟
［東海大学］

1.高校生をとりまく多文化とは

植民地時代を経験した台湾では政策的に日本のものを否定した時期があって、一時日本、日本語に関連するものは人々の目に触れることが少なかった。しかし、1987年に戒厳令が解除され、1994年に日本のテレビ番組の前面正式解禁とともに、マスメディアへの規制も無くなった。この時期から台湾では日本のものだけではなく、実に多様な異文化も入ってきた。有線放送の民間テレビ局のチャンネル数は70以上に上る。また、ハイテク技術の向上でパソコンやネットの普及などにより、学習者にとって学習のリソースも手段もプロセスも一段と多種多彩になってきた。90年代に生まれた現在の台湾の青少年たちは、10代までにドラえもんと一緒に過ごしたり、桃太郎の話を聞いたり、中学生時代にテレビゲームや渋谷ファッションを楽しんだりして、そして高校生になると、情報収集技術を駆使してネット上の情報を得るようになる。

このように、台湾の高校生をとりまく学習環境には、植民地時代の教育を受けた祖父母から聞いた話、サブカルチャーの影響、メディアからの情報、国境を越えたサイト情報など、多様な文化があふれ、彼らはこうした新情報と自分の持っている情報を融合して、第二外国語の授業の中であらたな学習をしている。今回は台湾の台中市にある「台中女子高級中学」（以下台中女中）の高校生たちの学習成果としての発表を通して、中等教育における第二外国語としての日本語授業のあり方を探ってみようと思う。

2.中等教育の第二外国語のこれまで

国際交流基金の調べによれば台湾における日本語学習者人口は世界で五番目に多い（2003年）。その中に特に青少年の学習者数の増加は著しい。それは近年日本の若者文化のアニメーション・マンガ・Jポップなどサブカルチャーが台湾の若者に人気を得て、それを背景として日本語の学習もブームになった。

時代の流れに合わせて、台湾の普通高校で第二外国語教育が実施されるようになった。そして、1995年新しい『高級中学課程標準』（学習指導要領）が発布され、フランス語、ドイツ語、スペイン語のみだった第二外国語科目に日本語が加わった。1996年～1999年『推動高級中学選修第二外国語文実験計画』が実施され、指定校に認定された学校で試験的に実施された。この時期、台湾では若者を中心に「哈日族」（日本大好き族）が増え、日本ブームであったため、日本語を選択する学生が多くなってきた。1999年～2004年『推動高級中学選修第二外国語教育五年計画』が実施され、指定校のみの実験計画から正式に全国規模で実施されるようになった。2005年～2009年『推動高級中学選修第二外国語教育第二期五年計画』が発布され、現在続行中である。履修者の推移は表1の通りである。

表1 台湾の高校における言語別第二外国語履修者数の推移

	日本語		フランス語		ドイツ語		スペイン語		合計	
年度	クラス	人数	クラス	人数	クラス	人数	クラス	人数	クラス	人数
1997	72	2,093	19	412	12	285	1	16	104	2,806
1999	300	11,158	62	1,948	40	1,214	10	280	412	14,600
2003	411	14,857	94	2,828	31	933	24	688	560	19,306

【教育部（1998）『高級中学第二外語実験教学報視報告』より】

3.台中女中の日本語授業

3-1第二外国語の実施

台中女中は台湾では有名な公立の進学校で、2001年から文系大学へ進学予定の二年生を対象し、選択授業として第二外国語が実施された。選択したい語学を事前にアンケートを行い、週2時間で1学年（約40週）の授業で構成する。2005年から高校の特色として必修授業になった。生徒は日本語、フランス語、スペイン語、ドイツ語から一つの語学を選べるが、2005年のクラス

数の状況は日本語４、フランス語２、スペイン語１で、日本語を選択した人はいつも圧倒的に多い。

３-2学習者のリソース

台中女中は第二外国語の実施はそれほど長くないが、前にも書いてあるように、「哈日族」が多く占めるこの世代は日頃接するリソースは多様多彩である。2004年国立国語研究所が実施した「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」では、台湾地域の高校生を対象して行ったインタビュー調査（15名）の結果は表２、表３、表４。（国立国語言語研究所（2006）『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究』より）

表２ 高校生学習者の場的学習リソース

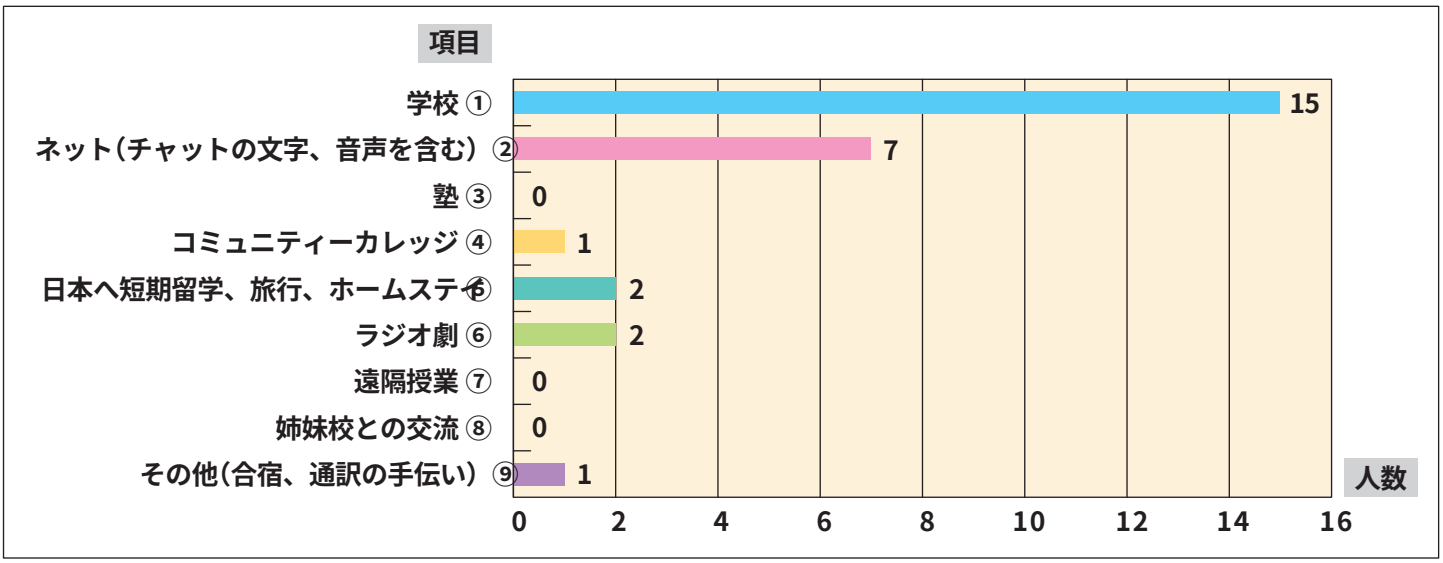


表３ 高校生学習者の物的学習リソース

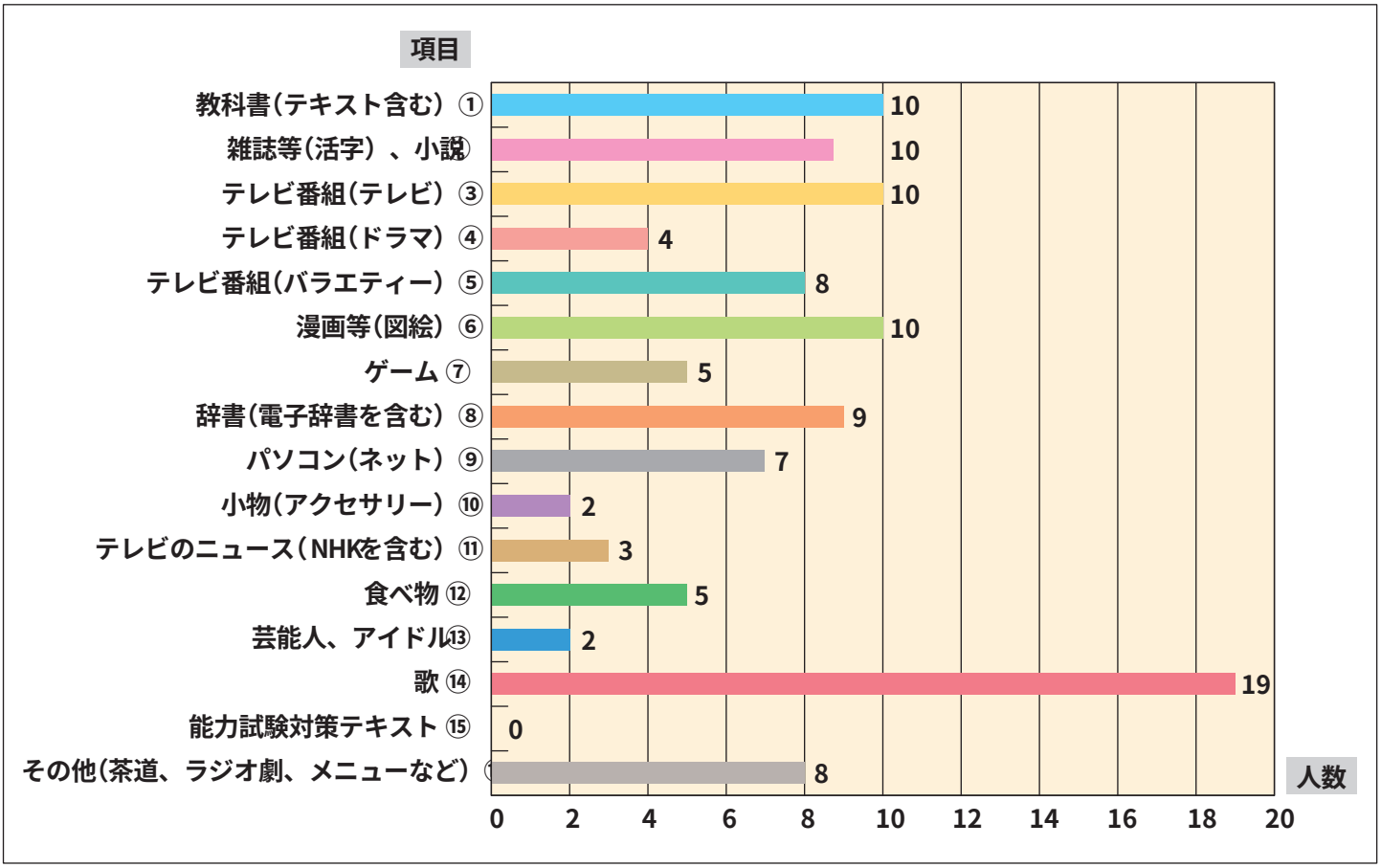
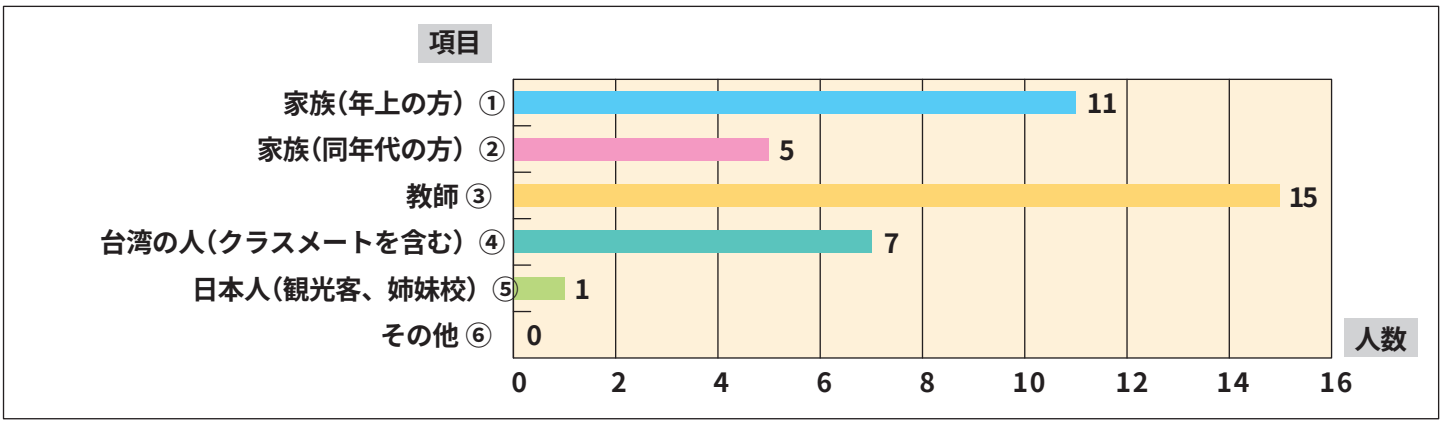


表４ 高校生学習者の人的学習リソース



調査結果から特に高校生の物的リソースの多様化が明らかになって、全般に以下の特徴が挙げられる。

a)家族、特に年配者からの影響やきっかけが多い

b)日本語を趣味として、学習の目的は生活をより豊かにするために

c)能動的に学び、言語の習得を限らない、「日本」と関連する情報を知りたい

d)今後も専攻や趣味に関する知識を獲得するために日本語と接する

e)色々なサブカルチャーを通じて日本を知り、日本と接点を持ち続けている

3 -3語学力よりも文化に興味がある

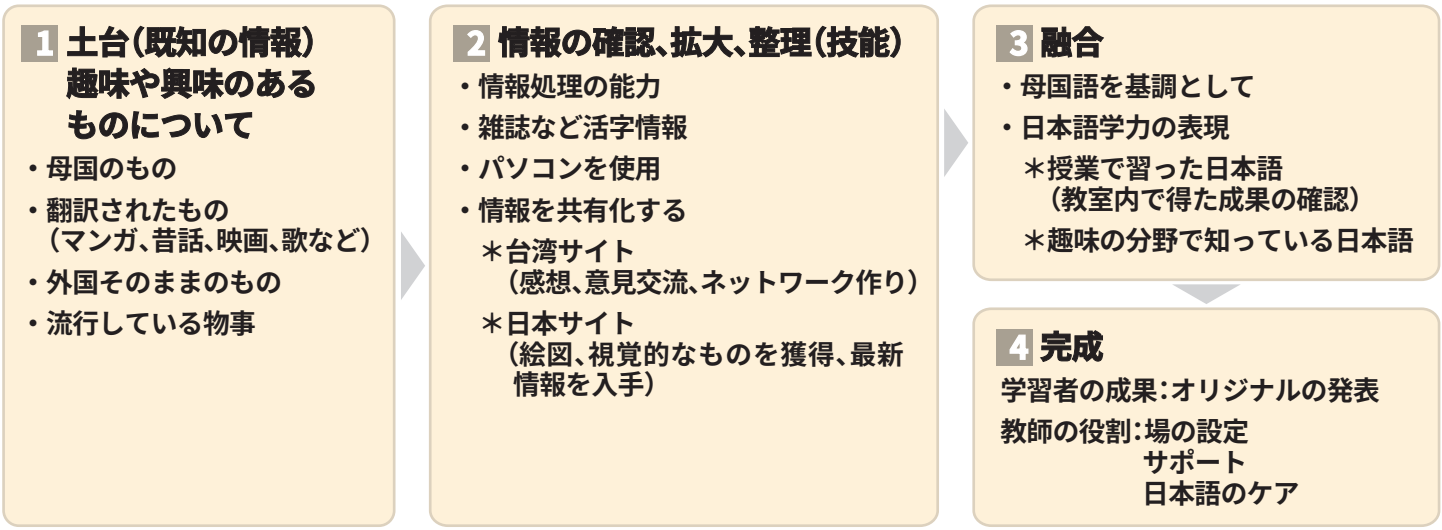
ただし、台中女中のような進学校の場合は第二外国語の授業を積極的に取り入れることは時代の流れと言いながら、日本語は大学の入試科目ではないし、選択授業なので一般教科ほど学校側も学習者も重視していないので家庭学習も期待できない。そして、週に 2時間ならば、一期（台湾は 2期制）は中間、期末試験や学校行事などで授業ができないことがあるので、約 30時間しか確保できない。これでは、日本語力獲得の効果が期待できない。このような事情があって、教師は語学力をつけるよりも日本の文化、日本事情が知りたいという学習者のニーズに合った授業を提供し、語学そのものよりもむしろ、異文化教育という視点を持つことのほうが重要であろうと考える。

4.学習者の発表

以上の状況を踏まえて、期末テストは筆記試験を行わずに寸劇 (2004年)とレポート発表 (2005年)を実施した。その際に決まりの制限は無く、教室内で習った文型や教室外で知ってた情報、日本と関連があれば何でもいいだけである。

今回の発表実例から、高校生たちは既知の情報を土台とし、パソコンを駆使する技能を利用して、ネットで台湾、日本、中国のサイト情報をうまく取り入れたことを分った。例えばアニメについての発表は、日本のサイトで一番新しい映像を入手して、中国のサイトで翻訳された物を意味の確認など楽しんでいて、台湾のサイトで同好会の友たちと意見交換などをやることも

図１　多文化を融合するプロセス



4 -1発表実例の紹介

4 -1 ① 寸劇「日本昔話 ちゃんぽん編」

この実例では「既知の情報」の段階を多く占めていて、「情報の拡大や確認」の作業はあまりないが、うまく融合して、そして日本語も入れて完成した。

a)既知の情報：

① 桃太郎、一寸法師、開花爺爺（花咲かじいさん）、竹取公主（かぐや姫）、浦島太郎、鶴の恩返し

説明：出てきた日本昔話の人物。小さい時から見聞きで慣れた昔話で、知ってた人物を上手に次々と登場させて、新しい物語を作るのが楽しんでいる。そして、この寸劇を通じて今まで中国語訳名で読んでいるこれらの人物の名前を日本語で読めるようになった。

② 賢者之石（ハリーポッターと賢者の石／映画）、陰陽師（おんみょうじ／NHKのドラマ）、活著真好（ある身障者の映画／台湾）、絵文字（若者文化の一つ）

説明：時代を反映する物。物語に必要な役名は話題の物やドラマに出てきた人物を使用したり、若者が馴染んでいる絵文字でハッピーエンドしたりする。

b）情報の拡大

鶴、亀、香魚（あゆ）、日本酒、萬寶鎚（打ち出の小槌）

説明：日本をイメージする物。場面に合わせて、動物や物を「日本の物」で演じる。台湾では日本料理の代表メニューである鮎（香魚）や、日本のお土産としてよく買われる打ち出の小槌（萬寶鎚）

c)日本語の融合

参上（さんじょう）、封印解除（ふういんかいじょ）、大佐（たいさ）、事後乱入（じごらんにゅう）

説明：漫画やアニメで見かける単語。これらの単語は読めないが、絵から意味が分かったり（参上）、漢字から意味を推測したり（封印解除、大佐、事後乱入）する。

d)特色

説明：日本語の表現について、授業で教えた表現を取り入れる（自己紹介、趣味など初級の文型）。マンガなどで知っている単語も使う（常体の表現、てめえ）。できる日本語は限られたが、知っている違った文化の物をうまく共生させて、劇を楽しんでいることも大事である。このグループのメンバーは日本語の語学力は普通なので、知ってるものだけ言わせて、あまり直さなかった。

4 -1 ② レポート「日本の文化と祭典」（PPTを参照）

この実例では「既知の情報」も「情報の拡大、確認、整理」も多く占めている。日本語の表現は多くないが、特に情報処理の技能が優れていて、かなり違った言語のサイトを利用し、「融合」して完成した

a)既知の情報：

お正月、東北のお祭り、雛祭り、子どもの日

説明：メンバーに、アニメ、ファッションなどサブカルチャーから伝統行事や祭りまで、日本の全てに興味がある日本大好きの「哈日族」が何人かいる。紹介した内容は教師から訂正したこともないから、日ごろから自分で偏らない情報を把握でき、獲得したことも分かった。

b)情報の拡大と融合：

壁紙、マンガの絵、アニメ、写真

説明：多くの写真で日本習慣や文化を紹介した。挨拶の言葉などはゴシック体の日本語で標示されたり、東北の四大祭りにも行う時間を書かれた。バックの壁紙に使われた図絵は若者がよく知っているから、出てきたときクラスに興奮の声が

聞こえた。使われた図絵は実に台湾、日本、中国、韓国、英語のサイトから得た物に驚いた。そして、ネットから「青春家」というアニメで鯉のぼりのイメージを具体化して紹介した。

5.まとめ

現在、台湾における普通高校の第二外国語の授業は、ほとんど選択授業で時間も短い。大学入試の受験科目ではないから、高校側も生徒たちもあまり点数重視の授業を望んでいない。一方、選択授業を選んだ理由は、日本語が好きだから、日本のものをもっと知りたいから、が圧倒的に多い。せっかくの学ぶ意欲が筆記テストばかりで評価をするようになると授業も無意味になるだろう。それで、私は最初から台中女中のこの授業を「第二外国語の日本語の授業」というより、むしろ「異文化理解の授業」と認識している。焦点は自分と違ったものと接したり、感じたり、受け入れたりすることで、その過程で日本語の基礎となるものを勉強してほしいと望んでいる。

その上で、台中女中の学習者の発表成果からいくつか確認したことがある。

・場を与えて、能動的な学習を導き、やる意欲を出させることはとても大切である。

・ コンピューターを駆使できる生徒たちが、身のまわりにある多文化をとりこみ、情報の獲得や拡大をしていく能力はわれわれが想像したよりはるかに優れている。

・一つの場で違和感無く多文化を取り入れたり、自分の趣味を紹介したりすることを楽しめる。

その国の言語ができれば、他人に頼らず直接に情報の入手ができる。しかし、翻訳技術が発達している21世紀なら、外国語が分からないからその国を理解できないということもあり得ない。例えば、日本で作られたゲーム機やゲームソフトは日本からそれぞれの地域に発信して、少なくとも今回の5つの地域でビジネスなり、同好会なり色々なネットワークができた。そしてインターネットのグローバル化により、各地域間で情報の行き来も盛んになっている。今後、日本に関連あるものを架け橋として、東アジア各地域間の横の繋がり、意見交換、交流をもっと活性化させるべきではないだろうか。そして、次世代を担う若者の成長過程に、実は多かれ少なかれすでに多文化と共生していると思う。そういう意味から考えると、第二外国語としての日本語授業は言葉の勉強と平行して、異文化を理解することにより学習の楽しさをもっと味わえるのではないだろうか。

参考資料

1.上條純恵・李金娟 (2006)「台湾の中等教育における日本語学習者の学習リソースに関する面接調査」国立国語言語研究所「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－海外調査の成果と展望」

2.工藤節子 (2006)「学習リソースとの接触は何をもたらすか」国立国語言語研究所「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－海外調査の成果と展望」

3.李丁讚、陳兆勇 (1998)「衛星電視與國族想像―以衛視中文台的日劇為觀察對象」第56期新聞学研究

4.谷野憲治 (1997)「現代台湾文化考」龍谷大学経済学部経済学科ゼミ発表

参考資料

4-1 ① 寸劇「日本昔話 ちゃんぽん編」

《第一幕》

旁　白：很久很久以前，有一個桃太郎想來一個大冒險，於是他就勇敢的上路了。

桃太郎：あ、いい天気ですね！(悠閒貌)
啊！今天天氣好啊！
咦！那裡有一座好漂亮的花園，就讓我進去看看吧！（踏進花園）
(突然雷聲大作～～壞人現身！)

壞　人：てめえ～～。竟敢跑到我的花園中，接受我的懲罰吧！
可惡～
帕美魯克拉魯克、拉哩囉哩波胚～（轉圈圈）
哈！變成一吋法師吧！

桃太郎：あ～いやな感じがする～。
啊～好討厭的感覺啊～

旁　白：變成了一吋法師的桃太郎逃出了花園，
決定前往東方尋找傳說中的賢者(之石)來幫助他恢復身高XD

《第二幕》

（開花爺爺被埋在花堆中）

開花爺爺：いたい～。
好痛～

鶴　　：咕～咕！（著急地轉圈跳著）

桃 太 郎：何があった？
怎麼了？

開花爺爺：救我啊～

桃 太 郎：大丈夫～I'm coming～（桃和鶴一起把開花爺爺拉出來）
沒問題～

桃 ＋ 鶴：嘿咻！嘿咻！（開花爺爺被救出來了）

開花爺爺：ありがとうございます～。白鶴！幫我報恩吧！
真是太感謝你了～

鶴　　：YES！OK！大丈夫！（啄身邊的竹子）
沒問題！
(砰的一聲公主跳了出來)

竹取公主（害羞）：こんにちは、私はかぐや姫です。どうぞよろしくお願いします。
您好，小女子是竹取公主，請多多指教 >/////<

桃太郎（害羞）：お会いできて嬉しい！
很高興認識妳 >/////<

旁白：於是兩人一見鍾情，並攜手走向東方。

参考資料

4-1 ① 寸劇「日本昔話 ちゃんぽん編」

《第三幕》

(陰陽師在家中，二人敲門，此時晴明和博雅正在喝美酒、配香魚)

晴明：どなたですか。

是誰啊？（其實神早就告訴我了…）

桃太郎＋竹取公主：桃太郎とかぐや姫さんじょう。

桃太郎與竹取公主參上！

(晴明一拍手，門就開了。)

桃 太 郎：你好，我是從遙遠西方來的旅人，請你把我變回原形吧！

あのう、これ、ほんの気持ちです。

嗯、這個、一點小小的禮物不成敬意。(把萬寶鎚給晴明)

晴　　明：其實這是一把擁有強大力量的鎚子，只是你不懂得如何使用…

おれの力を見せてやる。

讓你見識我的厲害吧。(轉圈+回眸一笑+華麗手勢+閃亮碎玻璃花背景+呆滯的博雅)…

隱藏著神秘力量萬寶鎚啊，以你的主人晴明之名，命令你～封印解除！

旁　　白：在發出一道炫目的閃光之後，一吋法師被變回了原來的大小。

桃太郎（低頭看自己）：啊！恢復了啊！

竹取公主(感動)：啊～我良人～

（兩人相擁，後面出現了"活著真好"巨幅廣告）

桃太郎（轉向晴明）：ありがとう！

感謝你！

晴　　明：我有一個朋友叫作浦島太郎，最近要去日本海建立龍宮，

和他的龜朋友們宣導交通海底安全，你可以跟他一起回去啊！

桃 太 郎：ほんとう？我該去哪裡找他咧？

真的嗎？

晴　　明：Right here！霹靂卡霹靂拉拉波波利那貝貝魯多！浦島太郎出來吧！

（結果出現鼻子尖尖、鬍子翹翹、手裡還拿著釣竿的．．．．．波爾先生！？）

晴　　郎：Oh no、變錯了嗎？

浦島太郎：いいえ！私です。是我沒錯！前陣子沒錢去兼差拍了廣告……

不！

桃 太 郎：總之、よかった。我們回日本吧！

太好了

浦島太郎：OK！Let's go ！Bye bye～

《終》

大佐(事後亂入)：我想養烏龜……

共生力育成手段としての日本語学校
～大阪ＹＭＣＡの現場から～

山佐亜津子
［大阪ＹＭＣＡ学院日本語学科］

１.日本における日本語学習者および日本語学校の概要

１.近年の日本語学習者の傾向・大阪ＹＭＣＡの学習者層

多様化…留学生のタイプ、在留タイプ

留学生…中国・香港・台北・韓国の経済発展に伴い、苦学から自分探し、異文化体験・ファッションへ

「行けば何かあるかも知れない」「何か変わるかも知れない」

在留タイプ…短期滞在の異文化体験、長期定住型（家族滞在、日本人の配偶者、就労の長期化とその家族…）の増加

２.日本語学校の役割

大半は日本語学習および進路指導、つまり進学予備教育機関としての意味、生活適応の支援

３.複言語、複文化

・大阪ＹＭＣＡの場合、約 20ヶ国からの出身者

・歴史観、価値観等の相違による議論や衝突と認め合いの積み重ね ⇒ 教室内が共生の実体験の場

・「違うことが当たり前」の日常

・国籍がグループ化の条件ではなくなってくる　ex.)台北、中国本土出身者同士の交友

2.大阪ＹＭＣＡ日本語学校について

教育目標

①学生の自ら学ぶ力、自発性を引き出し、自立した学習者に育てる

⇒ 目的・目標の不明瞭さ

②日本語学習目標の達成を援助し、自己実現を支援する。

⇒ 日本留学でステップアップしたい、学歴をつけたい

③異文化社会での生活を支援し、学生の共生能力を養う

⇒ 異文化理解・国際理解教育としての日本語教育

④多文化共生の開かれた地域社会をＹＭＣＡ会員や地域団体との協働によって形成してゆく

⇒ 受入側の地域社会啓発、地域とニューカマーとの関係性の構築

3.大阪ＹＭＣＡ日本語学校の実践

１.狙い：

○日本語学校としての装置

・地域社会と日本語学習者との橋渡し ⇒ 日常生活が学習と交流の場

○ＹＭＣＡボランティア活動

・「支援」「被支援」ではなく、ＹＭＣＡメンバーとして、共に助け合うための「協働」の体験の場。

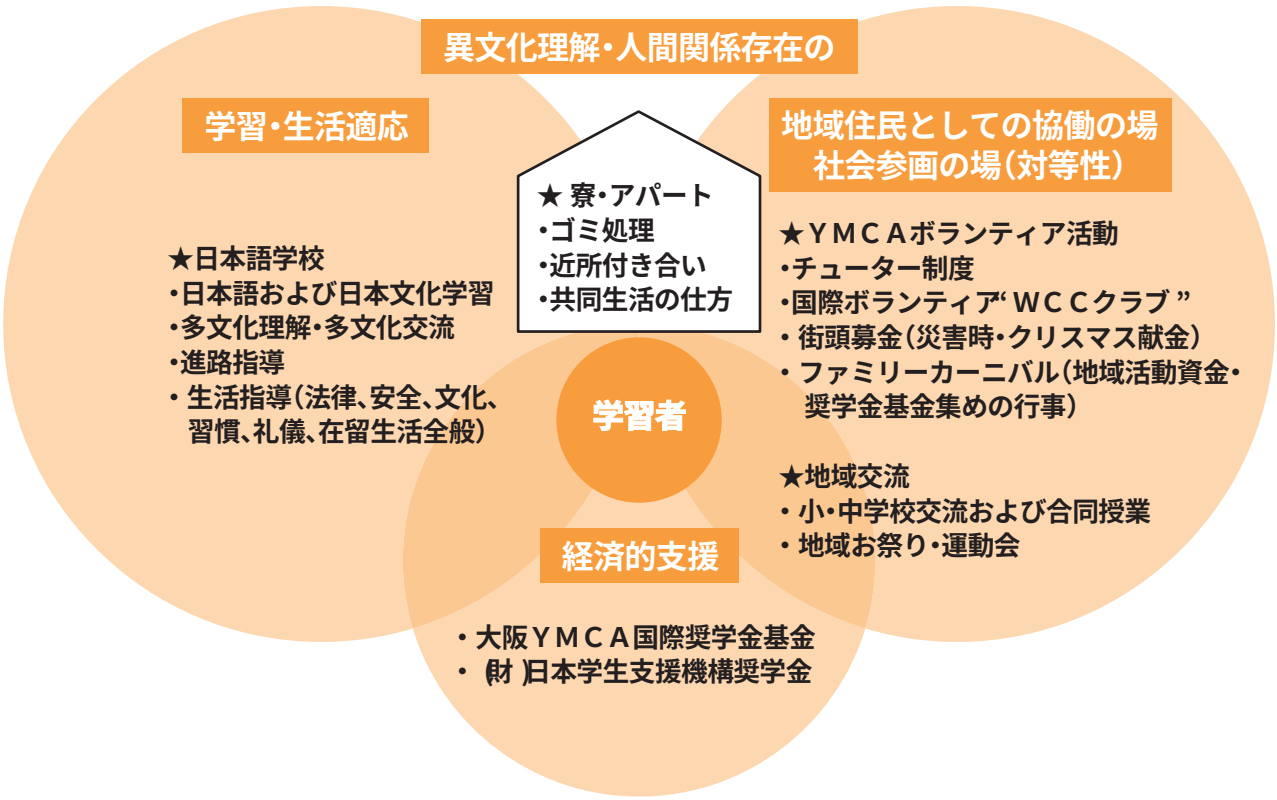
・一地域住民としての、地域日本人と対等な立場での人間関係創り。社会性の育成。

・友人作り

○地域交流

・子どもの国際教育

・地域住民の国際化



1、学校および地域活動に見る学習者の特徴

① 東アジア出身者の共通点…

② 各文化圏による相違点……

2、学習者の成長と変化

目標到達、成功体験 ⇒ 自信、自己開示、自己実現…

ボランティア体験 ⇒ 人との協力・協働、心の定着、社会貢献への意識の芽生え、学業への取組みへの好影響

3、地域日本人の変化

・「留学生を助けたい」から「留学生に助けられた、学ばせてもらった」…
尊重心、アジアへの関心

・「○○人の○○さん」から「○○さん」… 個人としての認識 ⇒ 日本の国際化

5.まとめ

★日本語を媒体とした協働によって、青年期の発達段階において影響を与える異文化受容の幅、人間関係構築力、問題解決能力、ボランティアリズム ⇒ 共生力の育ち

★日本語学校という装置の中で、関わる日本人と地域が変わる、変える。

★「異文化理解」「異文化受容」から、「違いの活かし合い」「相互変化」へ

付録

★ＣＥＦ（ヨーロッパ共通参照枠）

ヨーロッパ共同体策定によるＣＥＦ（外国語学習到達レベルの共通の枠組み）

⇒ 目的：国際協力促進、ヨーロッパ内の人の動きを容易に、効果的なコミュニケーションと文化間の相互理解促進

東アジア共同体（？）による共通参照枠（日本語・韓国語・中国語）

⇒ 人的交流促進と相互理解のために

日本の高校での国際理解教育実践からの発題
～参加型・獲得型の学習形態を用いた、平和学への入門学習を通して～

野島大輔
［千里国際学園］

1.平和学の成果の、中学 高校教育への導入

A.平和学（平和研究）

1.学際性・客観性・理論性…などは既存の科学と同じ

2.実際的な志向価値（平和の実現）を持った科学であることが特徴

3.対象とする「暴力」現象 ← J.Galtung博士による概念の拡張

a.直接的暴力（武力紛争、ジェノサイド、など）

b.構造的暴力（貧困、飢餓、抑圧、教育機会の喪失、など）

結果は直接的暴力と同じだが、背景に社会関係の格差があり、多くの場合は加害者が自覚を持たないが深刻な被害をもたらす～例：１日10万人（うち子供３万人）の死

c.文化的暴力（善悪二分論、政治自然主義、“水に流す”、など）

直接的・構造的暴力を承認・助長したり、仕方のないものと位置づけ易くする考え方。

2.国際理解教育の学習で有効とされている様々な学習形態

A.獲得型学習

学習者自らが主題を設定し、自力で情報や学説を探し当て、自分の意見に責任を持って発表や討論を行う。

B.参加型学習←国際連合“人権教育の10年”

役割学習、実演学習、のように学習者自らが疑似体験などを通じて、五感を働かせながら学ぶ。

C.メディア・リテラシーの教育

報道や情報を誰がどのような目的で発信しているか、見抜いた上で活用する力を育む。

D.多元学習（発題者が実践研究中）

上記ABCを連続活用しながら、学習者が様々な意見や立場を多元的・総合的に把握し、自らの結論を導く過程に重点を置く学習。社会科学の本来の学習過程の訓練。

3.実践事例

A.実施授業：千里国際学園　高校２～３年生　自由選択授業『地球社会と個人』

政策決定ディベート（小集団立案発表と討論の学習）「東アジア共同体の構想」2004年11月

肯定側・否定側に分かれて、時間を決め、立論・尋問・反駁（第一・第二）、結論の順で討論

B.生徒達の主張内容

1.肯定側（プランを立て、実現した場合の肯定的変化を主張）

①目的：国際協力の推進、

②組織：国家代表者会議を中心に分野別委員会を持つ、多数決（１対多の場合を除く）を原則採用する、ASEANとも連携する特別の委員会を設ける、

③効果：問題解決、貿易の活発化、共同市場の創設

2.否定側（プランが実現した場合の否定的変化を主張）

①個々の国家の反発による問題解決の困難性、

②安全保障面などでの欧米政府からの警戒感、

③APECなど他の国際機関との競合、

④アジアの特質である多様性になじまない

＜参考：J.Galtung博士の東アジア共同体の試案＞

中・韓・日などの東アジア主要国だけではなく、アイヌなど少数民族らの権利も保障

経済交流だけではなく、安全保障や文化交流を非暴力的・日常的に進める常設機関、本部沖縄

（cf.欧州連合、AU、北欧会議…世界の様々な地域での地域統合の動き）

4.民際交流の重要性

経済交流だけではなく、文化交流による相互理解を加速させる必要性

東アジアの長期的な安定にも貢献

以上

「東アジア地域での海外（帰国）子女教育プロジェクト」と韓国の海外帰国子女教育

井嶋 悠
［日韓・アジア教育文化センター］

1.プロジェクトの趣旨

［以下、いずれもプロジェクト主幹の佐藤郡衛氏（東京学芸大学）の言葉から］

□『海外子女教育は、グローバル化の中で大きく変貌しているが、これまで「日本人の育成」を目指してきた。日本人学校は、「現地」や「現地の人」を他者化することで、自らのアイデンティティ（日本人）を確立し、その独自性や優位性（日本人性）を確立してきた。しかし、最近の海外子女教育の現状を踏まえると、これまでの「日本人」や「日本人性」を自覚的にとらえ直す必要が出てきた。（中略）
本プロジェクトでは、海外子女教育に内在している「日本人」「日本人性」の問題を克服し、「日本型多文化教育」を軸にした海外子女教育の理論的視野とそれを実現するための実践のあり方を検討することを目的としている。」

□『海外子女教育の今後の課題を考えるには、理念や目標からだけでは対応できない。海外子女教育の初期の提案を読み返すと、「国際人の育成」「国際的に活躍できる日本人の育成」「国際性の涵養」「優れた言語能力」、逆に「国内並みの教育」「帰国後の教育の充実」等々、同じ言説が繰り返されている。いわば、「診断なき処方箋」が描かれてきた。これまでの海外子女教育の現状を客観的に把握し、その成果と課題を踏まえた議論が必要である。』

2.研究員（'06.7、現在）

佐藤郡衛　［東京学芸大学国際教育センター］
熊野 孝　［桐朋女子学園］
曾 容子　［国士舘大学］
拝野寿美子［東京学芸大学連合大学院博士課程］
矢崎弥生子［東京学芸大学院研究生］
稲田素子　［立教大学］
井嶋 悠　［日韓・アジア教育文化センター］
尹 裕淑　［韓国・教育人的資源部］

3.文部科学省科学研究費の報告論文集の刊行〔2006年12月 刊行予定〕

【構成・内容】（予定）

「東アジア地域海外帰国子女教育調査研究プロジェクト」

１章　日本における海外子女教育の新展開（佐藤）　（　）は執筆者
２章　東アジア地域の日本人学校の動向
　　1節　日本人学校の現状と問題点（熊野）
　　2節　日本人学校における国際結婚家庭の子どもの教育（佐藤）
　　3節　日本人学校における日本語教育・人権教育（井嶋）
３章　韓国における海外子女教育の現状と課題（尹・井嶋）
４章　台湾における僑生教育（曾）
５章　中華学校の現状
　　1節　日本の中華学校の現状（曾、稲田）
　　2節　中華学校を選択する日本人保護者（稲田）
　　3節　アメリカにおける中華学校（小林）

６章　韓国学校の現状

1節　日本の韓国学校の現状（矢崎・井嶋）

2節　韓国学校の言語の教育（矢崎）

3節　アメリカにおける韓国学校（佐藤）

７章　在日ブラジル人学校（拝野）

８章　海外子女教育の新しい動向（佐藤）

4 .海外帰国子女教育・外国人子女教育から見えて来る今、その社会そして私
～私の個人的体験からの実感として、またこの会議の私の視点として～

□自身、自国、自社会自地域での‘当然・常識”と世界の【間（はざま）】への認識

⇔「知情意」の統合体としての《人間》と自身の生き方（Identity）

〔備考：ギリシャ世界・文化での調和性、「全人性」/ルネッサンスと東洋・アジア〕

私の背景・位置

・ 1945年 8月 23日生まれ（「団塊の世代」、1970年代）

・ 1973年から中高等学校（私立）の国語科教員

・ 1980年前後での、帰国生徒・外国人生徒との出会い（国語教育と日本語教育）

・ 1994年～2005年　インターナショナルスクールとのジョイントスクール勤務（国際バカロレア［IB］との出会い）

気付かされたこと～思いつくままに～

◇ 母語・国語（日本語）への再考

◇ 自文化（日本そして自身）への再考

＊日本語・日本文化の現代そして次代世界への貢献

＊論理性と非論理性、あるいは脱論理性 ⇔ 感性・理性 ← 知性と想像力

＊「和の心」

＊「国際とは？」「国際人とは？」⇔ ナショナリズムとインターナショナリズム

→〈相対〉と〈絶対〉と〈共生〉と〈ボーダレス〉・・・・・・・・・

◇ 教育への再考　［← 97%前後の高校進学率・年間約 10万人の高校中退者・大学の大衆化・大学全入時代・学歴論争］

＊初等教育⇔中等教育⇔高等教育・社会教育と人生〔備考：連結時での進学試験方法・内容と教育と教師〕

＊評価すること、そしてその自身の根拠⇔「できる・できない」

＊学力　［⇔文系と理系と「学力低下論争」と「ゆとり論争」］〔備考：「国際的学力」〕

＊教師　［教える・育むと教授法］← 教師社会での自己絶対性、閉鎖性、保守性

＊競争心理〈原理〉と人間と学校社会〔備考：日本的平等観と西洋的平等観と中国的平等観と韓国的平等観〕

⇔「受験競争」から「受験戦争」「受験地獄」へ

◇ 精神背景への思い到り

＊東洋と西洋

＊東洋での東アジアと日本

↓

☆自然と人間、自然観そして人生観

☆宗教と思想［仏教・キリスト教・儒教・道教・神道・・・・］

なぜ今、東洋か、アジアか、東アジアか

◇ その危険性

◇ その有効性

↓

国際社会［⇔国際化と西洋化と世界化］

そして

次代を担う若い人達と大人達（私達）の責務

韓国の海外帰国子女教育と尹 裕淑氏と私

◇ 相互啓発と共生 （「己の欲せざるところを人に施すなかれ」）

◇ 海外帰国子女教育と韓国

＊日本での派遣在留韓国人の増加

＊派遣在留韓国人と韓国人学校（韓国学園・一条校）と現地校（日本公私立学校）とインターナショナルスクール

⇔日本の海外派遣在留教育と帰国後教育

〔備考：・バイリンガル・バイカルチャル教育と母語教育と英語・トリリンガル教育〕

日本の受け入れ現状に見る日本性、国際性

〔備考：ESLクラスと JSLクラス・日本への観光客と日本人の海外渡航数〕

上海日本人学校での国際教育・海外子女教育の現状
（国や言葉を超えた交流をめざして）

酒井正人
［上海日本人学校 国際交流ディレクター］

石山由美
［小学部 4年担任］

はじめに

経済発展著しい中国上海市は、ここ数年上海在留邦人の数がうなぎのぼりに増加している。それに伴って日本人学校の児童・生徒数も増加の一途をたどり平成18年３月現在で、２,200人を超えるマンモス校になった。この4月には浦東校も開校し、新たに交流活動を築いていかなければならない状況もある。

本校に国際交流ディレクターが派遣され、すでに2年が過ぎた。この2年間に実施した主な交流活動は以下のとおりである。

１.児童・生徒の学校間交流

この2年間は全ての学年で地元の中国の学校と学年間の交流活動を実施することができ、児童・生徒が興味を持って取り組めるよう、学年の発達段階に合わせて交流内容に変化を持たせている。小学校低学年では遊びや歌を通しての交流、中学年では団体ゲームや伝統的な遊びの紹介など、高学年ではスポーツを取り入れた交流も実施している。さらに中学部では授業体験活動も取り入れ、互いの学校や文化に対する理解を深めている。学年間交流以外にも、中学部の部活動で現地校と親善試合を行ったり、交流委員会の活動で地元の中学校の生徒を招いたりしている。その他、地元の児童節行事に剣道や合唱の演技を披露したりするなどバラエティーに富んだ交流になっている。

虹橋中心小との交流（小学部 1年）

また、中学部各学年で実施した宿泊学習では、旅行先の現地中学校と交流活動を持つこともでき、現地の風土やくらし、同世代の考え方等に直接接することができ、より深い現地理解につながっている。

日本人学校では全学年週一回の英会話及び中国語学習を取り入れている。特に中国語については、現地理解学習の一環との考え方から身近な中国の人々とコミュニケーションをしたり、中国の文化や人々の考え方を理解したりすることを目当てに実施している。また、交流学習とあいまって交流の際に必要となる中国語会話の学習を取り入れたりしている。

２.中日スピーチ大会

すでに第９回を迎えた中日スピーチ大会は、日本人学校の伝統的な行事の一つである。上海日本人学校中学部の生徒と地元の中学校の生徒が互いに相手の言語でスピーチを行うものである。日中両校の生徒が日ごろの練習の成果を披露する絶好の場であると共に、互いの文化や歴史への理解を深める機会でもある。平成17年度はスピーチ参加者の健闘をたたえ、中学部全員の中国語による合唱を実施し、参加者及び参観者から高い評価を得た中日スピーチ大会であった。

中日スピーチ大会（中学部）

３.現地学校訪問および教員間交流

本校小学部教員及び中学部教員がそれぞれ地元の小学校、中学校を訪問し、実際の授業を参観した後、相互に熱心な質疑応答が行われた。特に印象深かったのは先進的な英語教育である。市内の小学校では1年生から英語教育を実施しているので学ぶところが多い。現地の学校事情や教員の価値観、更には中国の人々の生活習慣や考え方まで幅広く理解することができる教員間交流であった。

学校訪問（小学部教員）

今後の課題と展望

国際都市上海を反映して、上海日本人学校の保護者の中にも国際結婚が増えてきた。それに伴って日本語を母語としない児童の在籍数も増加の傾向にある。それらの児童の中には日本語の理解が不十分なために学習に支障をきたしているものもおり、その対応が急がれる。現状では担任に頼るところが大であるが、他に多くの児童を抱える担任の個別的対応では十分な対応ができているとは言えない。JLTクラスを設けることにより、メンタルケアを含む日本語指導教員の配置を検討する必要性を感じる。

おわりに

2010年の上海万博に向け、ここ数年上海市政府は国際教育を前面に押し出した教育政策を進めている。それを受けて、国際教育に前向きに取り組む学校もかなり増えてきている。交流を実施した学校のほとんどは日本人学校との交流に非常に前向きである。今後は新しく開校した浦東校も含めて、更に活発な交流を進めていきたい。

また、国際都市上海には多くの外国人学校があり、それらとの交流も児童生徒の国際的な感覚を養うために意義深いと考える。今後は教師が全てをお膳立てするのではなく児童生徒が主体的に取り組むような交流を企画していきたい。

〈参考〉国際交流ディレクターについて

今日、世界には82校の日本人学校及び188校の補習授業校がある。これらの在外教育施設では、海外に在留する日本人の子どもに対し、国内の学校教育に準じた教育を実施しているが、国際化の風潮により、ただ日本の勉強をするだけでなく現地の言葉や歴史、地理など現地事情に関わる指導を取り入れたり、現地校と協力したりすることにより、現地の子どもたちとの交流を積極的に進めるようになっている。

このようなことから、文部科学省では、平成2年度から在外教育施設を拠点として、国際交流ディレクターを派遣している。

〈国際交流ディレクターの職務〉

１．在外教育施設における現地理解教育のサポート

・現地理解に関する指導の年間計画や指導内容に関するアドバイス

・情報資料を収集・整理し教員に提供する。

２．在外教育施設における教育・文化・スポーツを通じた交流活動の推進

・現地校、国際学校、その他の教育・文化団体等との交流活動への支援

・社会見学、社会貢献活動などの校外活動の支援

３．現地社会に対する貢献・協力の推進

・日本の教育・文化・スポーツについての講演会・講習会の開催を企画すること。

・現地の人々への日本語教室の開設、日本語教育の支援について企画すること。

・日本人会等と連携を図った現地社会に対するボランティア活動を企画すること。

平成１７年度　国際交流活動一覧

交流日時	領域・教科	交流校	交流内容	当該学年規模
11月 23日	生活	上海虹橋中心小学 1年（来校）	全体、グループ（伝統遊び）	5組 147人
2月 22日	生活	上海虹橋中心小学 2年（来校）	全体、グループ遊び	4組 145人
5月 30日	総合	上海小学 3年（訪問）	ダンス 授業参観、凧揚げ体験	６組 267人
10月 19日	総合	上海小学 4年（来校）	全体、クラス別交流	６組 255人
11月 16日	総合	上海市吴泾第三小学 4年（訪問）	グループ絵画活動、中国結び	4組 120人
12月 15日	総合	上海市吴泾第三小学 4年（来校）	オリエンテーリング形式	4組 120人
12月９日	職員交流	上海市吴泾第三小学（教員間：相手校）	晩餐会	両校教員 19人
12月 27日	職員交流	上海市吴泾第三小学（教員間：相手校）	授業参観 体験	本校教員７人
1月 20日	総合	上海市吴泾第三小学 5年（来校）	クラス交流、スポーツ交流	4組 120人
11月 29日	総合	上海市虹橋中学 6年（訪問）	音楽、舞踊、遊び文化、長縄	5組 130人
1月 18日	職員研修	上海市吴泾第三小学（教員間：相手校）	授業参観、質疑応答	英、音、国
11月 2日	総合	紹興市魯迅中学（訪問）	文化交流、ゲーム	96人
11月 18日	総合	上虹中学（訪問）	授業体験、交換授業	70人
6月 7～ 11日	総合	修学旅行（敦煌第三中学との交流）	両校出し物、グループ交流	学年同等数
3月 1日	部活動	松江新橋中学（体験入学受け入れ）	日本語中国語での案内・説明	高校 1年生 4名
11月 25日	総合	中日スピーチ大会開催（本校：市内４校参加）	日中スピーチ	中国側 8名
10月 26日	部活動	上虹中学（バスケット、サッカー）（訪問）	交流試合	同等数
11月 17日	職員研修	虹橋中学（教員間：相手校）	授業参観、質疑応答	英語 /美術 /音楽
5月 31日	部活動　特別活動	虹橋文化中心影劇院（児童節行事参加）	合唱、剣道実演	各種外国人学校

東アジアと 国際化と 韓国からの 展望

李 瑛鍰
［韓国 麻浦高等学校 教諭］
［ソウル日本語教育研究会 副会長］
［日韓アジア教育文化センター理事］

1.何故今、東アジア（地域・文化）なのか

◎ブロック化

EU（ヨーロッパ連合） NAFTA（北米自由貿易協定） アジア（アジア共同体？）

◎文明の 中心は どこから どこへ

中国 → インド → メソポタミア → エジプト → イギリス → アメリカ → 日本 → 韓国 → 東アジア

2.韓日両国の声

子安宣邦（こやす のぶくに） 大阪大学 名誉教授

⇒ アジア共同体を作ろう。

兪炳勇（ユ ビョンヨン） 韓国学中央研究院 教授

⇒ 過去史についての日本の反省がない限り、時期的に早い。

3.東アジアの動き

ラオス 頂上会議 (2006)中国－アジア FTA（自由貿易協定）締結

日本も アジア FTA合意

推進方向 ⇒ 関税同盟を統合、共同貨幣（MONEY）への可能性

国家利己主義 ⇒ W N W N、弘益人間

4.國際關係においての道徳的 理想主義と 現実主義

	道徳的 理想主義	現実主義
核心内容	倫理、道徳規範が影響力を与える	権力、力が 影響力を与える
理論的 根拠	人間は理性的存在 国家の理性的行動信頼 国家間の自然な調和を信頼 → 見えざる手 の原理	人間は悪行の可能性を持つ存在 国際社会は、ホップズ式の自然状態 → 国家間戦争可能性常存
事実的 根拠	国際行為の規範発展強調 国際機構、国際法、国際世論の重視 国際協力、緊張緩和	局地的、國際的紛争可能性 イデオロギー対立 国家及び民族利己主義
問題解決手段	國際法、国際機構、国際世論	力（軍事力、競争力）

國際關係の多元化

両極化 時代
↓
多極化 時代

5.国際理解教育の現状と必要性

韓国 ＝ 第７次教育課程 国際理解教育 ＝ 創意的裁量活動科目

日本 ＝ 2002年から 国際理解教育実施

アジア地域で国際理解教育を独立的な教科目として教えている国は２ヶ国だけ

言語教育は 国際理解教育への出発

韓国の学生の対日本観変化

音楽、愛 ⇒ 国境なし

6.西洋の国際化と東洋の国際化

儒教、仏教、キリスト教

親孝行、思いやり、責任感、協同心、共同体意識、人間愛 → 現場教育の課題

⇒ 人間教育の方向について東アジアの各国の先生たちといっしょに悩みたい

個人主義、集団主義

7.韓国からの展望

独創性、優秀性はある。⇒ ワールドカップの道の応援、韓流、IT産業

李秀賢さん(2001.1)、申鉉龜さん(2006.5)の瞬間的な判断力はどこから出るのか。

一番、韓国的なものが、一番、世界的なもの！自国文化尊重しながら。

国際理解教育を通じて共に行く世の中を作りましょう！

参考

UNESCO APCEIU第6次 国際理解教育　学術大会資料

ニュース　メーカ　603号

一般社会　高校教科書　http://ilsa77.hhome.com/ilsa/ilsa5-3-1.html

子安宣邦のホームページ　http://homepage1.nifty.com/koyasu/remark.html

京郷新聞 メディア　カン　2006.5.14

京郷新聞 メディア　カン　2006.5.28

京郷新聞 メディア　カン　2006.6.26

中国の中等教育における日本語教育の動向

張 国強
［中国教育学会外国語専業委員会］

中国の中等教育における日本語教育事情について、ご報告をさせていただきます。

まずシラバスのこと、ちょっとお話を進めたいと思います。中学校・高校の「教学大綱（指導要領）」という言葉は、学校教育では、今あまり使いません。その代わりに「課程標準」という言葉を使います。新世紀に入ってから、中国教育部は世界と中国社会の変化に応じて、学校教育の改革を推進してきましたが、その大きな成果の一つとしては、すべての科目の『課程標準』の制定だと思います。

2001年、教育部が学習指導要領にあたる『全日制義務教育日本語課程標準』を発表し、つづいて、2003年普通の高校用の『高校日本語課程標準』を制定・公布しました。中学校・高校段階の日本語教育は、この二つの新シラバスに基づいて、行われていますが、現場の日本語教師の話によると、日本語教育の新シラバスの理念は正しいが、それぞれの地域の事情に合わないところが多いということですが、日本語教師自身のレベルも大きな問題の一つではないでしょうか。また大学入試の改革をしなければ、新シラバスの目標を達成することはなかなかできません。「受験地獄」「宿題戦争」のような厳しい学習環境の中で、学習者に自主的に、楽しく日本語を勉強させることはたいへん無理です。このような現場の日本語教師からの声が強いです。それで、シラバスを作る専門家としては、それぞれの地域へ行って、子供たちはどのように日本語を勉強しているか、学習環境はどうなっているか、日本語教師の授業ぶりを自分の目で見たり、座談会を開いて中・高校の日本語教師たちの意見に耳を傾けたり、アンケート調査をしたりして、できるだけはやく新シラバスの全面改訂を考えたほうがいいのではないでしょうかと、わたしは思っております。

また、中等教育のシラバスを補完する大学入学試験のためのシラバスもあります。このシラバスは、中国教育部の入試センターが編集したもので、問題の形式、量、点数、例、語彙表などに工夫が見られます。

それから日本語教科書についての話ですが、今、使っている中学校の日本語教科書『義務教育課程標準実験教科書　日本語（6冊））』は新シラバスにもとづいて、編集・出版されたもので、唯一の全国通用の日本語教科書です。教師用指導書（6冊）も制作しました。今は使用中ですが、日本語教科書検定委員と現場の先生から「発音段階は長すぎで、生徒の日本語学習意欲を促進するものではない」という話がありました。これから修正する必要があると思います。

目下、『高校日本語課程標準』に対応した新教科書の編集が進行中です。特徴としては、タスク授業を中心とする、言語活動の豊かな教科書です。作業事情から見れば、来年9月の新学期より高校一年生向けの教科書が使用できるように、編集者たちは努力しています。今、使用している『全日制普通高級中学教科書 日語（全3冊）』は、1996年の前後に編集・出版されたもので、一部分の話題はちょっと古いような感じがします。

小学校の日本語課程標準はありませんが、遼寧省教育学院が地域用の日本語教科書『小学日語教材（全4冊）』を編集し、2003年に完成しました。

日本語教育レベルの高い学校（特に日本語を専門科目として教えている外国語学校、日本語の授業時間数の多い外国語中学校及び職業高校は、『中日交流標準日本語』（人民教育出版社）』『みんなの日本語』（凡人社）』を補充テキストとして、使っています。また、日本で出版されている会話教材、読解教材、日本語能力試験対策問題集等の中国版が、さかんに使われています。

今の状況から見れば、初等・中等日本語教育における、日本語教科書の種類はすくなくて、教科書多様化の実現はとても難しいです。

つづきまして、日本語教師のことをちょっとお話したいと思います。外国語学校の教師は、すべて大学日本語学部卒の学歴を要求していますが、外国語中学校では、例えば、上海甘泉外国語中学校の日本語教師は全員大学卒で、反対に東北地域では、普通中学校・高校の日本語教師は、全体から見れば、大学日本語学部卒の人はたった全体の1／3にすぎません。高校卒の学歴の日本語教師がかなり多いようです。

それで、現職の日本語教師の養成が何よりも大事なことだと認識しております。まとめて言いますと、現職の日本語教師の日本語能力の向上、新しい日本語　教授法の習得、日本文化理解などの促進をはかることを、まず考えなければなりません。東北各地方（省または市レベル）の教育学院や教師進修学校、課程教材研究所日語課程教材研究開発センター、中国教育学会

外国語専業委員会日本部などは、中国中等教育における日本語教育事業の発展のために、長い間努力してきました。ここ数年来、中国側と日本側は、心を合わせて、学歴が低い教師・経験の足りない教師に対する研修・交流を広く行ってきました。日本の国際交流基金北京事務所、日本の国際文化フォーラム、日本の国際協力事業団のおかげで、日本語教師の養成、教科書の編纂、日本での研修、日本語のスピーチ大会など、いろいろな活動があり、これらはたいへん有意義で、効果をあげてきました。このことについて、この場を借りて、日本の友人たちに心からの感謝を述べたいと思います。

　最後ですが、外国語教育、日本語教育の目的はいったいどこにあるか、とよく考えております。この前、尊敬する真木先生と楽しく話し合いました。本当の日本語教育は、言葉の知識・言葉の技能を学習者に身につけさせるだけではありません。国際人の持つべきもの、つまり、異国文化の理解、思いやりのある、生活マナーを守ること、国と社会に責任を持つこと、周りの人とよく付き合うこと、他人に親切にすること、そんな人間を育てることこそ、本当の教育と言えるのではないでしょうか。

以上でわたしの話を終えたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

小さな国際社会から大きな国際社会へ

張 国強
［中国教育学会外国語教育専業委員会 秘書長］

2006年 7月 26日、「中韓日国際会議」は上海の甘泉外国語中学校で幕を閉じました。

この「参加記」でわたしの感想を述べたいと思います。

地球はただ一つだけです。世界地図には国境線がかいてありますが、この地球に生きている人々の心の中には、国際交流の邪魔になる線はありません。われわれは同じ「地球」という大きな屋根の下で生活をしているからです。文化の違いによって、考え方、生活様式、風俗習慣などが異なりますが、それで異国文化理解・国際交流を行う必要があります。

この「中韓日国際会議」は、共通の文化で中国、日本、韓国の心豊かでたくましい、立派な若者を育成する会議だとしみじみ感じております。この世界平和を実現するために、この地球を守るために、中韓日の心の広い教育者は、一生懸命に頑張ってきましたが、今でもちょっとだけの力を尽くしています。美しい世界を作るために、この小さい命を広い大地に捧げたいと思います。私（たち）にとっては、残る日はもう多くはありません。でも、教育者としての民間大使の責任感を持って、未来に向い、この「中韓日国際会議」のような国際理解の活動を行って、中日韓の若者の国際交流の場をたくさん作ろうと頑張ります。それと同時に、われわれも若者と心を開けて「近くて遠い」隣の国をもっと理解します。

甘泉外国語中学校の会場は新しくできたのですが、それほど広くはありません。でも、この小さい会場は小さな国際社会です。中国（上海・香港・台北）、日本、韓国の若者は、この会場で、上海の町で、言葉の壁を越えて心の出会い、草根の交流を楽しくして、身近でありながら意外と知られていない隣の国の文化を理解することができるようになりました。最大の成果は、異文化の中で、隣国の友達との関係をゼロから作り直し、見直し、結果として自分自身を発見することです。もちろん語学力も飛躍的に上達するのです。

これはなんと大きな実りでしょう。わたしにとっては言葉で言えない大きな喜びです。

現在の青少年は、勉強中心の生活になって、進学と将来の就職のことを悩んでいます。宿題戦争・試験地獄のような勉強だけでは、偏った人間になってしまいます。これは現代の学校教育の悲劇ではないでしょうか。21世紀に生きて行く人間は、勉強をしっかりすると同時に、思いやりのボランティア活動・体を丈夫にするスポーツ、地球を守る活動・自然を愛する活動・外国の人との交流などにも参加してもらいたいと思っています。

この書面で中日韓の教育者の気持ちを少しでも多くの皆様にご理解頂き、次世代を担う、国際交流及び国際社会に順応できる健全な青少年を共に育てていけたらと願っております。

家から地域へ、教室から社会へ、川から海へ、自分の国から世界へ、中国・日本・韓国の若者よ、世界の舞台へはばたきましょう！

国際会議の感想

厳　偉
［甘泉外国中学高校 2年］

2006年 7月 25日、第三回中・韓・日アジア教育国際会議が我が校で行われました。光栄なことに、学校の代表の一員として、その中の生徒交流活動に参加しました。今度の活動で、いい勉強になりました。

これは、並みの外事活動ではありません。元学校外事部部長の私は、いろいろな交流活動に参加したことがありますが、今度の活動は外事活動に含まれていな がら、その内容と形式は今までの接待活動とぜんぜん違うことを深く感じました。

今度の活動のコースは以下のようです。

── 生徒たちがお互いに挨拶する
── みんな一緒に、研究のテーマを提案する
── テーマによって、グループに分かれる
── グループ内での討論
── 具体的な研究計画を決定
── 外で、研究調査をする
── グループで、レポートを整理する
── 最後の日にレポートを発表する

今度の活動の過程や私自身の感想を簡単にご紹介したいと思います。

交流している時、一番大変なのは言葉が通じないということではなく、きちんと他人の考えを理解することです。自分の出したアイディアだから、自分はそれが一番いいと考えているはずです。しかし、その理由で、他人の意見を否定あるいは無視することは絶対にだめです。それができないのなら、今度の活動は到 底完成できません。

私たち六人のグループは、中国上海から２名、中国台湾から２名、日本から１名、韓国から１名の生徒からなっています。言語では、日本語は通用します。たとえ、少しだけ、不理解や誤解があっても、みんな思いやりがあるから大丈夫です。しかし、言葉では通じていても、文化では、それぞれ違うところがあるから、みんなの考えが違うこともあります。同じ言葉や話に対する感じまで違うこともよ くあります。したがって、静かにみんなの考えをよ～く聞いた上で、詳しく討論することが不可欠だと思います。

この過程は難しく感じるかもしれませんが、実際にやるときは、もっと複雑でした。「人々の服装」を調査の中心に決定するだけには、二時間もかかりまし た。大変ですが、過程そのものが非常に貴重な経験になったと思います。

二日目の調査は、計画を進めて、予想以上に順調に終わりました。

三日目は、会議の閉幕式でもあるし、私たち三つのグループの発表会でした。

どのグループも、完全に自分たちの実力と成果を展示したがります。自分たちの努力を認めてほしく二日目の晩、各グループは発表会の内容を討論していました。もちろん、私たちのグループも同じです。発表の形式について、みんな異議はなくてもレポートの内容と構成については、みんなの意見がまた、数え切れないほど多かったです。

それにしても、2日間の接触を通じて、相手の言いたいことを何とか理解できるようになりました。文化の「衝突」というものの存在をだんだん、薄く感じるようになりました。それは、私が一番望んだことでした。みんな違う意見があるにもかかわらず、スムーズに完成しました。腕時計を見たら、もう１時 30分になっていました。そのとき、もう朝だと分かって、みんなは疲れていながらも、軽く笑いました。これは、私たち、違う国・地域から来た生徒が同じ目標に向かって、疲れも苦しみも忘れ、最後までやりぬいた過程です。私はこういう過程を大切にしています。

無論、私たちの努力はむだではありませんでした。翌日の発表会では、三つのグループ共に「完璧」に発表しました。今度の活動は、会場の皆さんの雷鳴のような拍手の中で終わりました。

今度の活動を通じて、私の日本語のレベルはいっそう上がったと思います。仲間と一緒に問題を予測・発見・討論・調査・まとめをする力もつけました。また、チームワークの大切さも深く感じました。一番重要なのは、違う文化を背景にした生徒さんと一緒に、交流・理解する力を養いました。

今度の活動のおかげで、私は「国際人になる」という私の長年の目標にさらに近づいたと思います。

思い出の夏

崔 盈菲
［上海市甘泉外国語中学（高校 3年生）］

夏休みに学校でアジア教育会議が開催されました。アジア各国から集まってきた先生たちと生徒たちはわが校で一週間の学習と街の見学旅行をしました。

その中で『皆で調査しましょう！』というイベントが行われました。中国文化や生活習慣について上海の人々にアンケートして、最終日の会議で発表するとい うことです。今回のイベントに参加した 16人の生徒を 4つのグループに分けます。

わたしは音楽グループに入りました。このグループはわたしを含んで 5人の女の子からなっています。初めて会ったとき、何か言いたいと思ったのですが、ちょっと恥ずかしくて、言い出せませんでした。でも、音楽のことを話したら、皆すぐ興奮して、話しました。皆は同じく音楽が好きだという共通点があり、すぐ仲良くなりました。

わたし達のグループは他のグループと違ってアンケートするのではなくて、自分自身で体験することにしました。皆は地元の音楽について話し合い、音楽を流 しました。音楽を聴きながら、討論することはなんと楽しいことでしょう。

その他に皆でカラオケボックスに行ったり、レコード屋に行ったりしました。少しでも調査に役立てればと思いました。他のグループと違って、わたし達のグ ループはリラックスした雰囲気に囲まれて過ごしました。

最終日の会議で見事に発表して、皆さんの拍手を浴びました。皆と別れた時、涙が出て仕方がありませんでした。

友達ができて良かったです。そして、こんな素敵なイベントに参加できて良かったです。

今年の夏は思い出の夏でした。

よかったら、また体験させてください。

音楽は言葉を越えて私達を一つにした！

田 雯婷
［上海市甘泉外国語中学校（高校 3年生）］

この夏休みに、一生記憶に残るようなすばらしい経験をしました。７月２３日、学校で中日韓アジア教育会議が開催されました。いろんなところから来た生徒 や大学生とであって、楽しい一週間を送りました。

この会議は、教育について各地の先生方のレポートの発表会と、各地の参加者（生徒と大学生）のグループ活動と二つの内容でした。私は友達の‘ えり ’と香港の‘ あいね ’と台湾の‘ りび ’と日本の‘ なみ ’と同じグループになりました。みんなが同時に三つのテーマの中の『音楽』を選んだ私たちは、『音楽グループ』となりました。メンバーのみんなが親切で、すぐなじみました。

私たちは、三日間を利用して、音楽についていろいろ調べました。最後の日に発表会があるからよい発表ができるように、みんな全力で頑張りました。問題 があったら話し合ったり、言葉が通じなくて、お互いに通訳してあげたりして、騒いでめちゃくちゃに見えるけど、みんな楽しんでいました。

とうとう発表の日になり、前の日の夜に、みんなひとつの部屋に集まり、それぞれ自分のレポートを書き、そして発表の流れを検討しました。『音楽グループ』の名にふさわしく、発表の前に歌一曲を歌っても悪くはないと思い、自分の考えをみんなに言いました。するとみんなが大賛成してくれました。結局、３時を過ぎてやっとできて、安心して寝ました。

最後の発表は完璧だったと思います。自分の気持ち、そして音楽への情熱がちゃんと観客に伝わりました。それに、私にとって、こんなにすばらしい一週間を体験したから、もう結果は重要ではありません。

上海でさらに高まった日本語への意欲

周苑儂【日本語名：愛音】
［香港理工大学二年生］

私は香港理工大学の周苑儂と申します。日本語の名前は愛音［あいね］です。先日、中日韓アジア国際教育会議を参加させていただいて、本当にありがとうございました。その五日間、毎日も楽しくて、いろいろな知識を身につけました。
他の国の学生たちが日本語を勉強してる理由や方法など分かって、文化交流ができました。それに、初めて日本語でグループ報告しました。二日間でグループメイトと良い報告もでき、すばらしい経験ができて、とても嬉しかったです。

そして、香港に日本語と日本が好きな友達がいなくて、とても寂しかったです。しかし、その五日間、たくさん日本語と日本歌手が大好きな違う国から来た学生たちと友達になりました。帰国のあとで、会えなくてもみんなとずっと友達だと思います。

実は、私は去年の五月から、日本語の勉強を始めました。ですから日本語が、まだ下手です。けれども、会議で会った学生たち皆日本語がとてもうまいので私は他の学生たちに負けないように、これからも一生懸命に日本語を勉強したいと思います。

その五日間のこと、私は一生忘れないと思います。出来れば来年まだ参加できたら良いと思います。

言語を超えた交流 ～第 3回日韓・ アジア教育国際会議に参加して～

李　金娟
［台湾　東海大学］

今回初めてこの会議に参加し、当初は知っている先生方もいなく、台湾での事前準備も出発前日にようやく終わり、上海現地での発表も上手く成し遂げられる　か分からなかったので、不安を抱きながら出発しました。発表では様々な国の生徒や先生方による発表を聞くことが出来たことは私にとって得たものはとても　大きかったです。また、この会議にあたって、中国の先生の行き届く準備にはとても感謝しています。そのおかげで、5日間ほとんど不自由することなく安心　して過ごすことが出来ましたし、私たちの学生と他の地域の学生も仲良くでき、普段はできない貴重な交流が出来たのではないかと思います。

ある生徒に聞いてみたところ、「参加して自分にとってとても有意義なものになったが、一方で自分の日本語の語学能力だけではなくて、自国や他国の文化などについてもっと勉強しないといけないことに改めて気づき、今以上に日本語の勉強に励もうと思った。」という感想を残してくれました。この生徒のように、今回の会議は参加した生徒たちや先生方の異文化に対する興味、関心を一層高めること、また一緒に 3～ 5日間に生活したことで、様々な面での視野を広げることも出来たと思います。

最初工藤先生に誘われたときから、学生交流にとても期待していました。三日間終えて、学生たちは自分のものを発信したり、他人から刺激を受けたりして、成果を収めたと思います。私は今回のように大人から枠をあまり作らない形がよかったと思います。今回は大学生が学生交流の部門に属し、しっかりとリーダー役を担いました。次回、もっと大学生を生かして、学生交流だけを目的とするのではなく、先生の話を聞く機会や、各国の大学生が学生交流の中間報告をしたり、先生方のように、自分の国で他国のことを調べ、ひとつのテーマを事前に準備して発表したりするのも良いと思います。そして、日本語教師というネットワークが日本ではなくて、他地域で行ったことは「日本」の要素を減少しながらも「アジア」に重点を置けられることが意味あると思っています。これ からも教授法などより、多文化理解の特色を作れることを願っています。

韓流や華流ブームが高まっていると言っても、アジアでは日本語の学習者数はやはり一番多いです。今回の会議では、もっとも印象に残ったのは日本国内でもあまり知られない海外における中等教育の日本語事情でした。先生方の報告資料では今まで自分が知らなかった韓国や中国の現状を知る事ができました。そして出席した高校生たちは一人ひとりがまさに実例のように映っていることはとても感動的です。会議が終わった今でも、毎日、学生交流の記録ビデオの完成とても楽しみにしています。また、これを日本の総合授業などの教育現場で放映し、是非異文化理解の教育面で有効に活用して欲しいです。今後もアジア教育国際会議の活動に大いに期待しています。

アジア教育国際会議に参加しての感想

蘇　家蓉
［東海大学生］

【ファッショングループのメンバー】
右の前から中国のマンショウとゲンイ、2列目の右からは台湾のイセンと私。次は日本の鶴ちゃんと韓国のリム *^_____^*

この活動に参加してよかったと思う。参加した理由は、今までに大規模な学生交流会議に参加したことがなかったので、一度は行ってみたいと思ったのが一つ。また、台湾と緊密な関係がある中国がどんな所なのかこの目で確かめたかったから。

上海は想像以上ににぎやかできれいな町だった。熱い天気も台湾に負けないくらいで言葉も通じるから、あまり台湾に出たという気分がしていなかった。

学生交流と一口に言っても何をするのかなと最初思った。行く前に、先生からいただいたレジメを見て、自分が興味を持っていることを調べたり、ほかの学 生に聞きたいことなどを考えていたが、実際は個人の発表ではなくグループに分けることになった。

私のグループのテーマは「上海の人々のファッション像」だ。若者がたくさんいる南京路に行って、道を歩いてる人々に実際にインタビューをしてた。いきなり声をかけたので避けられたり無視されたりなど、少し冷たい目に遭ってしまった。もし自分が聞かれたらも同じ逃げるだろうと思って、どうやって受け入れられるか少し工夫を凝らした。それから、温かく接してくれた人もいたのでとても嬉しかった。

私の大学にもこうしたグループワークの授業が多いが、メンバーとの話し合いや打ち合わせなどが少し大変だった。しかし、今回もおかげで仲良くなった。人とのいろいろ密なコミュニケーションができるというのはグループワークの良い点だと思う。

しかし、発表前の準備時間が、上海にいた 2日間しかないことには少し残念の気がした。もし母国にいたときにメンバーの間で、メール上でやりとりがあっ たら、今回の発表はさらに深い内容ができるはず。

また、いろいろ案内していただいた上海・甘泉中学の厳偉さんと万捷さんにもう一度ありがとうと言いたいと思う。

今回の教育国際会議は普段会議のかたいイメージとは違って、一緒に生活したり行動したりなど人と付き合う時間がとても多かった。その上、お互いに理解し 合えていい友達ができた。これから先、今回のような活動があったら、ぜひ参加したいと思う。

学生交流で得たもの

台湾　姜 怡瑄
［東京都立国際高等学校］

私にとって、上海での5日間は非常に有意義で、私は他の国・地域の学生からいろんなことを学ぶことが出来た。元々興味があって、他国・地域の文化は少し知っていたけれど、上海で話をして、もっと学ぶことが出来た。戻ってからも知り合った生徒とは連絡をとっていて、私は素敵な友達に出会えたと思う。

他の生徒に会うまでは、この5日間でどれぐらい仲良くなれるのか疑問だったが、到着したその日に仲良くなることができ、日本語で話したり、相手が母国語で喋っている内容を当てたり、写真を撮ったりした。また、部屋は自分と異なる地域から来た生徒と一緒で、私は韓国の大学生と同じ部屋だったので韓国語を教えてもらったり、一緒にテレビを見たり、好きな歌手について沢山話しをしたりした。意気投合すれば、出身国や地域に関係なく仲良くなれることを改めて実感した。

私たち生徒交流の最大イベントは、あるテーマについて市内学習をすることだ。私のグループは上海の観光スポット「南京路」で現地学生へファッションについての街頭インタビューをした。私は初めての経験だったので、やる前は現地の人が私たちの質問に答えてくれるか心配したけれど、答えてくれた人は海外から来た見知らぬ私たちの質問にちゃんと答えてくれて、上海の人はすごく優しくて暖かい人が多いと思った。そして、インタビューの時に、上手く今回の会議の趣旨を説明できなかったので、メディアを通して、彼女たちに今回の会議が伝わればいいなと思っている。グループ市内活動では上海市内をまわれるだけではなく、上海市民の生活雰囲気にも直接触れることが出来た。バスには運賃を徴収する人が乗っていたり、駅のホームは台湾や日本よりきれいで、電車の乗車券は全てカード式だったり、スーパーには市場みたく量り売りのコーナーがあったり。こんな機会がなければ、私は上海に対して大都市だけど、市民生活はまだ不便というイメージをずっと持っていたかもしれない。

5日間の中で最も新鮮だったことは、甘泉中学の先生による「日本語」の授業。私は台湾出身だけれど、幼い頃から日本で生活しているので、私にとって日本語は第二母国語で、学んでいる内容も日本人同様。しかし、今回の授業を受けてみて、日本の学校ではあまり学べないものを学んだ。発音のアクセントや敬語。自分ではある程度分かっていると思っていたけれど、意外に先生の問題に答えられなかったりした。「外国人が話す日本語の方がきれい」ということがなんとなく分かった。今回出会った生徒たちの日本語もすごくきれいだなと感じたので、皆の日本語を見習おうと思った。

今回の学生交流は到着した日にグループ分けをして、その後はグループで活動する時間が非常に多かったので、同じグループにならなかった生徒とはあまり交流が出来なくて残念だった。こんな機会があって出会えたのだから、みんなともっと仲良くなれる活動を増やして欲しかった。なので、私の提案は、到着したその日に親睦会を開いて、自分の国・地域を紹介したり、出し物を出したり、全員で遊べるゲームをしたり、グループ分けをしたけれど、グループ関係なくみんなと交流するといいと思う。または、初日の午後に全員でひとつのテーマ（東アジアの関係など）について話をすれば、ただ交流をするだけではなく、他国・地域についても知ることが出来ると思う。良い発表をするために多くの時間を費やすのもいいと思うが、もっと多くの人と話したり、一つのものを作ったりして、いろんな価値観や文化を知ることが学生交流の一番大きな目的になればいいなと思っている。

今回、学生交流に参加し、上海・韓国・香港・日本の生徒と交流ができて、この夏は学校の勉強以外に東アジアの生徒について勉強することが出来た。1分間スピーチで私は「今回の交流会のことを私の友人にも話したい」と言った。私は戻ってから多くの友人に交流会の内容や楽しかったこと、皆に教えてもらった各国・地域の文化を話した。興味深く話を聞いてくれた友人もいて、私たち若者がいろんな国や地域の生徒と交流をして、相手の文化を理解することが出来れば、東アジア地域の関係はもっと友好なものになると思った。5日間は本当にあっという間の時間だけれど、得たものは数えられないほど多い。これからも、学生交流で学んだことを多くの若者に伝えたい。そして、私たちが東アジアの絆をもっと深いものにしていきたい。

受験勉強と人との出会いからの勉強

李 薇
［台北市立内湖高校生］

実はこの活動を参加する前、私はとても迷っていた。この 5日間で学校と塾の勉強をするのか、それとも、上海に行って各地域の学生たちと交流するのか、 なかなか決められなかった。しかし、台湾に帰ってきたら、上海に行ってよかったと思った。なぜならば、勉強は自分で追いつくことができるが、人々と出会うのは運命に任せるしかないからだ。

一緒に活動していたときは、皆は全て日本語で話していた。最初は自分の日本語レベルの低さにやっぱり引け目を感じていた。だが、違う見方をすれば、「ことば」というのはコミュニケーションするためのものであり、自分の言いたいことをどうやって人に伝えるかが一番大切ではないかと思っていた。恥ずか しく思うことは全然必要がない。

周りの人に通訳の手伝いも時々していただいた。私の言いたいことを気長に聞いてくれた皆様に心から感謝しています。

私のような受験生にとって、教科書で勉強するのはもちろん大事なことだと思うが、今回の経験を通して、人から学んだことも大事だと分かってきた。

第３回日韓・ アジア教育国際会議に参加して

権 俊（クオン ジュン）
［永登浦女子高等学校］

第３回日韓・アジア教育国際会議は私にとって新しい経験と勉強ができた、かいのある会議であった。最初に私を驚かせたのは活気溢れる上海の街の様子であった。中心街に立ち並んだ高層ビル、いたる所に建設中のアパート、施設のいい学校等、中国の発展ぶりを見た。上海市甘泉外国語中学の寮の素晴らしさに感心した。私たち参加者を暖かくもてなしてくれた甘泉外国語中学の職員たちの親切さと思いやりに強く心を打たれた。

「東アジア地域・文化圏での相互理解、相互協力そして共生のありようについて、教育・文化の視座から考え、実践の方途を検討する。」のが今回の会議の主題であった。７月２５日から二日間の発表者の発表全てが素晴らしくて有益なものであったが、今回の 国際会議で最も印象深かったプログラムは「学生交流」であった。

学生交流には日本・韓国・中国大陸上海・香港・台北の各地域から高校生 2名、大学生１名が参加した。限られた短い時間で交流実践、報告・発表と討議まで素晴らしくできる学生たちは東アジアの若物たちの能力と可能性を確認させてくれた。

東アジアの国と地域の間には難しい問題があって、それを政治的に利用する政治家たちもいる。未来の世界を担う若者たちを相手の文化や立場を理解し、客観的で思いやりのある人間に育てるためには 今回のような学生交流が何よりも効果があると思う。

今回の学生交流には１５名しか参加できなかったが、東アジアの人たちがより友好的になるためには人の交流をもっと広める必要がある。そのためには予算のことが大きな問題として出てくる。それぞれの国と地域が青少年交流にもっと力を入れる社会的雰囲気を作ることが私たち参加者と指導者たちの課題である。

最後に日韓アジア国際会議を成功させるために誰よりも東奔西走、ご尽力なさった井嶋悠先生に感謝申し上げたい。また、会議の準備と世話をなさって下さった張国強先生と甘泉外国語中学の皆様にもお礼申し上げる。

小さい交流が育むこと

李　瑛鍰
［麻浦高等学校　教諭］
［ソウル日本語教育研究会　副会長］
［日韓アジア教育文化センター理事］

今回の第３回韓日・アジア教育国際会議では、二つ大きく感じたことがあります。

その一つは、これからの東アジアの交流は民間交流中心にならなければということでした。国家と国家あるいは政府と政府との交流はいろいろ壁ができやすいから、交流を続けるのがたいへんでしょうが、わたしたちのような純粋な民間次元での交流はいつまでもどこでも可能であり、そのような小さい交流がアジアの平和と発展の元になるのではないかということを池明観先生の特別講演から（前、韓国翰林大学日本学研究所長）きいて、頷きました。

もう一つは、いくら小さい交流だとはいっても、今回の交流は民間次元としては、３カ国以上が参加した盛大な会議でしたが、それを準備なさった方々の努力が非常に大きかったということに感じることができました。特に井嶋先生、朴且煥先生、張国強先生、陳姫先生などの準備委員たちの隠れた汗と努力がなかったら、このような立派な国際会議はなかったと思います。

この場を借りて感謝の気持ちを お伝えしたいです。ありがとうございました。

今度の活動のおかげで、私は「国際人になる」という私の長年の目標にさらに近づいたと思います。

上海での交流会に参加してから

金 珉炅
[韓国ソウル・光新高校 2年生]

もう八月二十四日だ。時間があまり経ったようではないのに、上海での交流会から帰って来てから一ヶ月が経った。まだ日本語がたくさん不足な私にとって、今回の交流会はいい勉強になった。

まずコミュニケーション。外国人に「日本語」という一つの言語でコミュニケーションしながら、お互いに共感して感じることができるという胸のときめきがあった。日本語では説明しにくくてできない時の切なさもあったが、お互いに学んで、教えてくれる姿が格好よかった。新しいことに対した説明を聞いて分かるようになった時の快感もあった。また、歌手や芸能人の話だけではなく、大学入試や文化に関した話をしながら共感を持つことができるということも良かった。韓国では接する機会が別になかったから、「上海での交流会」とすると、上海でのコミュニケーションについてのエピソードが一番思い出されるようだ。

次は皆が一緒に撮った写真だろう。韓国であったら、気がつかなかったのが、上海ではすべてのものが特別だった。変化しつつある上海で、韓国人ではない人々と韓国語ではない言語で一緒にいるということが不思議だった。すべてのこと心によくしまっておきたい思い出でいっぱいだった。

テーマを決めてグループ別に活動したこともいい勉強になった。食べ物チームだった私たちはコミュニケーションの過程だと言えるか、お互いに通訳をしなければならなかった複雑な状況だったけど どのグループよりも深みのある交流ができたと思う。

発表するとき、もうちょっと自信を持ってとうとうと述べたらという気持だったが、交流会に参加したことだけで幸せを感じた。

上海での交流会で心と心で会って本気で交流したからお互いに別れにくかったのではないか。

発表の後、自由時間があったときも「あたし、泣くかも知れない。」とか「別れる時、大変なのかもね。」等、さまざまな話をした。結局、空港に行くバスに乗る前、飛行機に乗りに行く時は皆泣いてしまった。韓国行きの飛行機の中で、ぼっとしているとき「あ、ほんとうに交流会に参加したんだ。」と思った。

言語の力って、本当に驚くべきだ。というのは私たちをひとつに結ばせてくれるからである。おのおの国で異なる生き方をしてきたはずなのに、短い時間にもかかわらず仲よい友だちになったのが不思議だった。「見えない運命の糸なんて、やっぱり存在するかしら」と思った。

国際化、世界化になって行く世の中に一歩ちかづいた気持ちだ。もうちょっとひろい世の中で、眼識を持って暮すことができるようになったのではないか。また、「自分が本当にやりたい事は何か」ということについて考えるようになった。広い世の中で自分がやりたい事を探すことが難しいことだが、交流会の間、熱心に撮影してくださったオオサカさんとサイモンさんを見ながら、自身もやりたいことに気づいたのは感謝すべきことだと思う。

最後に池明観先生の講義を聞くことができて本当に嬉しかった。 交流会に参加した国は確に歴史的にいろんな問題で複雑な関係である。先生の講義はそんな状況でこれから進む方向とお互いにどんな態度を持たなければならないかということについての答えになった。日本語を学びばかりするのではなく、学んだ人としてどんな活動をして世の中に役立つことができるのか思うようになった。

やっぱり感想文を書けばあらゆる思い出が思い出される。私にとっては最高の誕生日プレゼントになった。もし今回の交流会で会った人々が韓国に来たら、韓国のあっちこっちに対して自信を持って紹介できるよう日本語の勉強と韓国について頑張らなくちゃ、と思っている。

このような出会いができるようにいろんな面で苦勞してくださった先生方々に真心から感謝する。

上海で

キム　ヨンリム
［韓国　Sogang大 1年］

蒸し暑かった今年の夏、中国の上海での四泊五日間の体験は私にとっていろいろなことについて考えられるきっかけになった。大事なあの時の思い出を一つずつ浮かばせれば今にも戻りたくなる。

中国で集まったいろんな国の生徒たちはみんな‘日本語を学んでいる’という共通点があってお互いに話したり意見を聞いたりするとき、言葉が通じるので相手についてもっと深く理解することができた。もちろん言葉が通じなくても人の心を知ることはできるものだ。でもそれはただ知っているだけで‘理解する’ためには言葉というのが必要だ。私が言葉の重要性を感じたのはプレゼンテーションを準備する際だった。うちのグループのテーマは‘上海の若者たちのファッション像’で直接に町にでて中国の若者にインタビューをしなければならない主題だった。日本語ができる学校内の生徒たちには日本語でインタビューができたけど町を歩いている人々にインタビューをする時は、中国人のグループ内の一人が説明をしなければならなかった。さらにグループ全員が、日本人ではなくほとんど‘日本語を勉強している外国人’だったのでお互いにも１００％通じるのはできなかった。でも私たちは無事に発表を終えた。みんなの苦労のおかげでできた。

会議のタイトルは‘教育国際会議’だったが私が興味深かったことは、人と人の関係が国家間の問題に影響されるかどうかだった。でも人間関係に国の違いはどんな影響もされなかった。

私たちは同じ国の人のように同じ年頃の話題で話し合った。私はみんなのことを国の違う外国人ではなくただ大事な友達だと思った。私は台湾人の‘イセン’と同じ部屋を使った。彼女は私と同じ韓国の芸能人が好きで、韓国語の勉強もしてるので早く親しくなった。私たちはお互いに中国語と韓国語を教えてくれたりしで‘イセン’は私のことを“オンニ（韓国語で姉ちゃん）”と呼んだ。‘イセン’の受験が終わったら韓国で会うことにした。‘イセン’だけではなくいろんな友達と今でもずっと連絡している。あぁ、また会いたい！

上海での経験は小さな私に大きな何かを与えてくれた大事なできことだった。

幅広い国際交流を求めて

酒井正人
［上海日本人学校国際交流ディレクター］

今回のアジア教育国際会議は中国上海での開催ということで、地元で働く私にとってはとても意義深いものでした。特に、日ごろから上海日本人学校と交流のある甘泉外国語中学が会場と聞き、期待する気持ちも大きいものがありまあした。

内容は期待をはるかに上回るものでした。日本語教育関係者を中心とするものの、小、中、高、大それぞれの識者、先生方をはじめ、高校生、大学生の参加もあり幅広い交流ができたと思います。発表内容も、日本語指導に関することから国際教育全般にわたってのものが多く、とても参考になりました。

上海市は2010年の上海世界博覧会開催を控え、ここ数年全市的に国際交流に力を入れています。それに伴い、市内の公立小中学校も国際交流や日本語も含めた外国語教育に前向きに取り組む学校が増えてきています。そういう意味では甘泉外国語中学以外の地元の学校の発表もあればもっと深い研究協議ができたのではないかと思いました。

私の勝手な提言で申し訳ありませんが、今後は日韓だけでなく、今回のように中国も含めた「日中韓・アジア教育国際会議」というかたちで進めることはできないものでしょうか。日本語学習者は中国でもうなぎのぼりに増えています。歴史的なつながりも含め日中韓三国は今後も深いかかわりを持ちながら発展していくに違いありません。そんな中で日本語教育も含めた国際教育、多文化共生教育に焦点を当て、さまざまな世代、ジャンルの方々が交流できることを望みます。

最後にこの会を主催された全ての方々の努力と熱意に感謝いたします。

ありがとうございました。

東アジアの一員として

石山由美
［上海日本人学校］

この夏、会議に参加し、様々な立場から日本語の指導にかかわっている各国の先生方にお会いしたこと、そして学生のみなさんとの出会いはとても有意義なものとなりました。

上海でも年少者の日本語教育に係わりたいと願っていましたが、日々の授業が精一杯で、日本語の指導はなかなか思うようにできず、発表に向けての資料作成時に、これまで手探り状態で行ってきた「日本語指導」を客観的に考えることができたように感じます。また、この会議では、先生方の発表から指導のヒントをいただいたり、更に新たな課題が見つかったりと、初心に帰って自分自身を見つめ直す良い機会になりました。

一方で、「学生たちのパワー」には強く心を打たれました。共通の言語がなくても、様々な方法を駆使しながら課題に取り組み、自分の意思を伝え合う姿に感動したのと同時に、どんな状況でも生きていくことのできるようなたくましさを感じました。日本と東アジアの国々との関係についてのニュースを頻繁に耳にしますが、「アジアに生きる一人」として、あの学生たちのような「国境を感じさせない関係」になれる日が来ることを願いながら、これからも日本語の指導に当たっていきたいと思います。

最後に、会議の準備をしていただいた先生方、本当にありがとうございました。またいつかお会いできるのを楽しみにしています。

東アジアの揺り籠として

野島大輔
[千里国際学園]

ちょうど会議の日取りを挟むように、東アジアの国際関係は、二次大戦後最悪とまで表現される状況になってしまっていました。今においても、残念ながらその状況は必ずしもよい方向へ向かっているとは言えません。大きな武力紛争の発生した中東から帰国、関西空港をほぼとんぼ返りのリズムで、ある種の覚悟を持って、初めての中国大陸へと向かいました。

思えば、欧州、米州、東南アジア、太平洋地域、そしてアフリカにも地域共同体作りが進められる現在、東アジアだけはほとんど二次大戦後の空気のまま取り残されている感があります。それどころか、冷戦や内戦の傷跡も未解決のままに多く放置されているといえましょう。過酷な爪痕をもたらした日本政府の禍は、いまだ重苦しさを随所に漂わせます。加熱する自国中心主義や、無理な経済発展政策は、環境を破壊し、少数者や弱い立場の人々を苦境へとにじり詰めています。兵器の開発実験を進める国は周辺国からの圧迫を言い、それを非難する国の国民は、自国らの大演習の軋轢を自覚しません。そしていずれの国も、超大国の巨手を背後に感じつつ…。

電子塔から眺めた矩形の地平線は、かつて高校時代に初めて訪れた異形の東京を思い起こさせる姿。２千万を上回る人口を抱える不夜城は、まさに数世紀にわたって世界列強の思惑の歪みを一身に受けてきた地。そしてわずか一年前には、大規模な反日暴動が起こった町でした。

この街において、東アジアの各地から訪れた若い人々が共に集い、交友を育てるという、会議の中核プログラムには、既にどれだけの意味が自ずと加わっていたことでしょう。「帰りたくない」「朋友ができた」とはしゃぐ学生たちの、さわやかな発気に接することのできた私たちの幸せは、それこそ東アジアのすべての大人で味わいたい至福の賜物でした。

非日本語教育者の私からは、「東アジア共同体の構想」をテーマにした、所属校での政策決定ディベートの授業の実践報告をさせてもらいました。もちろん既存の単元の学習ではないので、どこにも‘答え’はありません。数日の調査の支えを元に、いったんスタートのチャイムが鳴れば数分の持ち時間の中で、即興のやりとりをする真剣勝負。生徒たちの取り組みの熱心さに打たれた当時の経験を思いつつ、「私の授業でもやってみたい」「こんな授業を経験したい」と言って下さった方々に感謝を致しました。スタッフの皆さんの工夫の末、何とか上映していただいたビデオをご参加の皆様に鑑賞していただきながら、若者たちの考える明日の東アジアの姿を、ここでも少し垣間見ることができたように思います。

実は、上海への旅の直前まで訪れていたのは、セイシェル共和国。小さな島国ながら、多民族 多宗教が上手に共存しています。厳しい自然保護政策が守り抜いてきた、海、島、そして見事な星空。所得税はなく、医療と教育それに留学までが基本的に無料という、福祉の行き届いた、目立たぬ優等国です。イギリスやフランスなど強国の圧倒的な力による洗礼を受けながら、30年あまり前に円満な独立を果たし、いまや世界各地から憧れて来る移住者が絶えません。治安良好、天災はなく、固有種の鮮やかな色彩の鳥たちが空に銀輪を描く毎日が、この同じ地球という星の上にあるのです。

楽観はできぬというものの、楽園セイシェルの姿への一里塚を上海・甘泉の太楼にも見ることができた喜びを胸に、長江を下り、東シナ海を渡り、トビウオの群れの奏でる舞曲を聴きながら、日中国際フェリーの船上で穏やかな２日間を過ごしました。その船は、かつて仏の使者となり、この海を渡って東アジアに橋を架けるため、盲いた名僧侶の名を冠しておりました。

この会議が、非営利的な民間交流での東アジアの架け橋として、次の世代の揺り籠となることを願ってやみません。

「驚きの連続・・・」

神田尚人
［大阪ＹＭＣＡ国際専門学校　校長］

私にとって、二度目の上海訪問であった。一度目は、昨年夏、こちらも報告書に書かせていただいたが、やはり日韓・アジア教育文化センター主催の「アジア地区海外帰国子女教育研修と学校説明会」であった。

そして今回、「中日韓・アジア国際教育会議【第３回日韓・アジア国際教育会議】」である。ＮＰＯ法人代表の井嶋先生の生真面目な性格そのままに、流石の私も二回とも仕事・会議、そして参加者との交流のみの生真面目な上海訪問であった。

それは兎も角として、昨年も帰国子女の海外在住時の教育に触れ、目を開かれる思いがしたが、今回も、驚きの連続であった。

何に驚いたのかといえば、第一に上海・甘泉中学を始め、会議に参加した東アジアからの日本語を学ぶ高校生たちの、日本語能力の高さである。次に、その日本語を媒介としたテーマ別研究と発表の面白さ、テーマに取り組む高校生の国境を越えた、同時代の若者が持つ共通かつ豊かな感性である。そして、この交流が将来にもたらすであろう様々な可能性は、想像するに楽しく、驚くべき結果に繋がってゆくのではないか。

また、驚きを超え、はるかに次元の高い思いが私の中に生まれた。それは、井嶋先生を始め、これらの高校生の国際会議と取り組みを可能にした、日本語教育に携わる会議に参加された先生方の思いと行動力に、敬服の念を抱いたことである。

言うまでもなく、言語は思想や文化に強い影響を与え、支配さえする。為政者によって用いられた過去の歴史は、悪用された例の枚挙に暇がない。しかし、教育者の止むに止まれぬ良き取り組みは、このように未来への可能性として、輝きを持つことが許される。

国語教育の中で帰国子女に出会い、母語としての日本語を意識し、帰国子女が持つ問題や困難さを日本に留めず、母語教育・日本語教育の視点から、東アジアのネットワークの中で地道にかつ継続的に取り上げておられるその姿勢に、改めて敬意を表します。

中日韓・アジア教育国際会議に参加して－なぜ東アジアか－

山佐 亜津子
［大阪 YMCA学院日本語学科］

「なぜ東アジアか」。きっとお叱りを受けるに違いありませんが、恥を恐れずに正直に告白すれば実のところ、最初はその理由がよく解らないままこの会議に参加させていただきました。YMCAは世界各国、中でも特にアジア諸国との関係性を重要視しており、日本語教育事業においては学習者の大半がアジア人であります。しかし特に「東アジア」という枠で教育および交流を考えることは、少なくとも私自身の中には、これまでにはありませんでした。

歴史と現在と未来、東アジア諸国、縦と横から見る隔たりと絆、そして共生のための再構築。東アジアの文化と歴史を共有しながら、東アジア市民が共働により創造することの必要性とそれに対する希望。この会議は、机上の理論ではなく実践としてそのような見方を与えてくれた、非常に貴重な機会でありました。

平和創造に対する熱い想いと高い志を持つ日韓・アジア教育文化センター先生方、受入に多大なお働きと細やかなお心遣いをくださった甘泉中学先生方、青年の、限りなく柔軟な心と能力と未来への可能性を目の前に示し、改めて大人の責任と教育を見つめ直させてくれた参加学生たちに、心から感謝を申し上げます。またこれからのセンターのご活動に大きな関心と期待を寄せるとともに、共に歩む仲間であらせていただければと願っております。

感謝と尊敬を込めて。

中日韓・アジア教育国際会議参加記　～若い衆、上海（ここ）にあり！～

二宮　聡
［八洲学園高等学校］

前日に先発した生徒を引率どころか、追いかけるように関西空港に急いだ私であった。20年前の大学でのハワイ研修、修学旅行の引率、その他の旅行も数回経験しているが、単独で海外へ渡航するのは始めてである。国際会議が始まる 7月 25日までほとんど自宅に帰らない日々が続く中、国内線搭乗に慣れている感覚が消えず、ついつい国際線チェックインの時間が早い目ということなど忘れていた。大慌てで天王寺から「はるか」に飛び乗り、空港ではチェックインしようとしたが格安航空券のため、空港案内係の女性に聞いても正確にわからず…などなど、とにかくバタバタの出発になってしまった。ほうほうの態でようやく辿り着いた機内では、早速中国の雰囲気が充満しており、このときに海外単独渡航がはじめてだということにようやく気付き、フライト中は頭の中に不安が沸々と湧いてきたのであった。案の定、浦東空港では税関で思った以上に時間がかかってしまい、ましてやスーツケースが見つからずパニック寸前の状況に陥り、あれだけ言われていたタクシー乗り場で白タクに気をつけることを忘れそうになってしまった。なんとか主催の井嶋先生に用意していただいた「上海市甘泉外国語中学」までの行き方と住所・簡単な中国語が書かれたメモをタクシーの運転手に見せ、おまけに当校の中国語の教師に発音まで教えを請い書いてもらっていたものを発音したが、まるで通じなかった。再び言葉の通じない外国に来た現実に少々の悪寒を感じるのであった。大の大人が、これだけ「びびる」のだから、初めての海外・初めての国・人に出会う生徒はさぞ緊張しているであろうことが想像出来た。しかも、当校から派遣した鶴見さんのお母さんに出発前電話で本人の様子を聞いた所、やはり「緊張している」ということだったので、自分の事もさておき、とても心配になっていた。ところが、自分の身体がようやく学校に到着した処で、夕食の時間でとても楽しそうに食事をしている鶴見さんと話すことができ、心配していた様子が微塵も感じられなく安堵感が広がった。

上記のような私の現地まで行く話など、読みたくもない聞きたくもない、と言われる向きもあるだろう。なぜここまで書くかというと、今回の国際会議・交流に参加したみなさんが、とても頼もしく思えたからである。「若い衆ここにあり！」と自信を持って欲しいので、頼りない私の話を対比させたのである。若い頃は誰でも好奇心旺盛なはずである。が、現今の日本国内の状況を見れば、「若い衆」の元気の無さ、目の輝きが無い、ましてや好奇心旺盛な状況など感じられない。甲子園で死闘を演じ、久々に高校野球人気を盛り上げた選手諸君が輝いて見えたのもそのためであろう。

だが、本来は決してそうでは無いのだと確信をし始めている。上海で出会い日本語でもって交流できたみんなには、私風に言わせていただくと「若い衆上海（ここ）にあり！」と堂々と宣言していたのである。これだけ少ない時間でも、まさに友情は政治や国境を越え、結ばれることができるのである。この出会いは彼らにとっても、私たちにとっても大きな意義がある。

いつの時代でも「今時の若い者は」と言われるが、私たち大人は「若い衆ここにあり！」と言うことができる環境と空間を常に用意しておかなければならない。そのためには私たち大人がまず、胸を張って生きていく姿を見せ続けて行かねばならない。

最後に、当校では初めての学校を代表する「国際交流」の実践に、鶴見彩乃さんを派遣させていただいた、今回の国際会議に携わったすべての関係者の方々に心から御礼を申し上げる。

東アジア圏の一(いち)メンバーとして

門脇 薫
［山口大学］

昨年釜山で行われた第2回国際会議に引き続き、上海での第３回国際会議にも参加させていただいた。私自身、韓国・中国・台湾に滞在し日本語教育に携わった経験があり、また現在の仕事においても留学生対象の日本語教育の他に、大学の国際化のための学術交流等の業務で韓国と中国を担当しているため、「東アジア」がキーワードになっている今回の会議に参加することを楽しみにしていた。

会議では、東アジアの歴史についての講演に続き、日本語教育（その中でも中等教育における日本語教育）・国際理解教育・海外帰国子女教育等、異なった分野、異なった国・地域から様々な報告がなされ非常に興味深い内容であった。

2000年以降に香港や台湾では中等教育における日本語教育が盛んになったそうであるが、韓国でも2002年より新しい教育課程になり中等教育の日本語教育に新しい動きがあった。発表を通して海外の中等教育の日本語教育についてお互いに意見交換できるよい機会になったようである。日本国内の日本語教育関係者も、海外の学習者数の多数を占める中等教育の日本語教育により一層注目し、海外の先生方と連携していくべきだと思う。

また、今回は会議と同時並行して学生交流が行われた。年齢、地域・国も様々、使われる言語も様々といった中で、限られた時間で最後の日にグループ別にまとめの発表がなされたことに関心した。山口大学では毎年韓国と中国の協定大学からの学生5名を山口に招待し山口大学の学生と交流する「３大学交流プログラム」を実施しており、私はコーディネーターを担当している。今年で3年目になるが、どうしても大学の主催ということもありつい我々教員がプログラムの細かいことを決めてしまうところがあった。しかし、今回の国際会議での学生交流の様子を拝見し、学生達がかなり自主的に計画し行動することができるということがよくわかった。今後の参考にさせていただきたい。

前述のとおり私は韓国や台湾には住んだことがあり、仕事やプライベートで韓国や中国には年に数回訪問しているため、私にとっては東アジアの国・地域に訪問する際「外国に行く」という気がしない。実際短期滞在なら韓国や中国にはビザも不要であるし、福岡空港から釜山までの方が東京に行くよりも近い。本当に身近に感じている。皆同じ東アジア圏に住むメンバーという感覚になってきたのだろうか。

今後もこのような国際会議を通して得られた知識、ネットワークを東アジアの交流のために生かしていきたいと思っている。今回の会議では全体として日本語が共通語だったので私は自分の母語である日本語で発表させていただいた。韓国・中国・台湾・香港から参加された先生方や学生達は皆流暢な日本語で発表され、素晴らしいと思うと同時に恥ずかしいとも感じた。今後このような機会があったら、東アジア圏の一メンバーとして韓国語や中国語で頑張って発表したいと思う！

以上、今回の国際会議も非常に刺激になった。今後も継続してこのような会議が行われることを願っている。

身近にあった国際交流

山中七海
[Mid-Pacific Institute]

四日間、三ヶ国の人たちと共に生活をしてみて、いくつか気づいたことがありました。 まず一つ目は、みんな勉強熱心だということです。 私のグループにいた人たちは、私以外は母語が日本語ではないのに、母語が日本語の私よりもはるかに日本語が上手でした。とても驚かされました。日本人が英会話、英会話と話している間に、他のアジアの国の人たちが他のアジアの国の言語をこんなにも勉強しているとは知りませんでした。

同じグループのひとたちの中には、新しい言葉や表現に出会ったら、早速ノートに書き込んでいたりしました。私ももっと言語の勉強について努力しなければならないと思いました。

二番目に気づいたことは、国の壁を超えて若者達の文化がとても広がっていたという事です。上海の街に出て行っても、あらゆるところで、日本、そして韓国の俳優や歌手のポスターや曲が目や耳に自然に入ってきました。私のグループの子の中には日本の歌手の大ファンがいたり、私自身も韓国の歌手や俳優をある程度は知っていました。それから、グループの人たちとの話し合いにより、他国の歌手そして俳優への人気はそれぞれの社会環境によって生まれたことだと気づきました。

とてもおもしろいと思いました。

気づかないうちに他国の気に入っていてそして、自分の国にない所を自分たちの生活に取り入れていました。

たとえ、三ヶ国の間の政治的な関係があまり良くなくても、文化、特に若者達の他の国の文化への興味は誰にも止められません。政治家たちの関係が良くなくても、今の世代の国民がもう誰に言われなくても、交流ができていました。

驚いたと同時にとても嬉しかったです。

国際交流というのはとても日常的に行われていました。

でも決して、歴史上で起こったことは忘れてはいけません。過去と今を同時に考えることはとても難しいです。でもこういう機会で少しずつ改善していけたらなと思いました。

最後に、この四日間一緒に生活できた人たちに出会えて本当に嬉しかったです。

みんなでいろいろな所に行ったり、最近の学校の話や流行っているもの の話、大学の話など、まるで長く知っている友達のように話せて楽しかったです。

この会議に参加させて下さりとてもありがとうございました。

またこのような機会があったら是非参加したいです。

成長させてくれた交流会

鶴見彩乃
［八洲学園高等学校］

７月２４日に日本を出発し、上海で行われた「中日韓・アジア教育国際会議」は上海、台北、香港、韓国の学生数名と日本からは立命館大学院生とハワイの高校生、そして私の３名が参加しました。

出発前は母国語の異なる人とのコミュニケーションはやはり大変なのだろうと覚悟していましたが、上海に到着し、各国の学生と対面してみると皆とても日本語が上手で、日本のことをもっとよく知りたい、勉強したいという彼らの気持ちがストレートに伝わってきました。そして、昨今の韓流ブームの到来などで、今までにない接点が、隣国との間に生れたように見受けられるけれども、果たしてどれだけ日本の若者が、アジアの文化やその歴史に興味を示しているのかという疑問が私の中で生じてきました。

日本に興味を持ち、そして日本語を獲得している彼らと日本の若者たちを比較すると、このままではいけないのではないかという焦りさえ覚えます。つまりこの両者間のギャップを縮める役割が今回国際会議に参加した私たち日本学生の役割なのかもしれません。

このことは今後の自分への一つの課題にしたいと思います。

共に行動した東アジアの学生達から日本や日本人についての様々な質問を受ける中で適確な答えを出せないものが幾つかありました。

「異文化を知る為には、まず自分の国の文化を知らなくてはいけない」という言葉の意味を深く実感したということです。

彼らとの実際の交流となったのは、グループ別行動でした。

それぞれ「ファッション」、「音楽」、「食べ物」の中で興味のあるテーマを選び、調査に励みました。私は「ファッション」のグループに入り上海市内の若者に、最近の流行についてインタビューしたり、写真を一緒に撮ったり、日本では体験できないような楽しい時間を過ごすことができました。

インタビューを心良く受けて下さった上海の若者の対応を見ていて、今政治的な面で中国との関係が大変難しい局面であるということが全く感じられないものでした。日本のメディアから知らされる中国のイメージというものは、ほんの一部分でしかないということがよく分かりました。

このように多少の誤解を含んだ捉えかたは多くの日本人に当てはまることなのかもしれません。今回の国際会議では私が考えていた東アジアのイメージを払拭し、自分の目で見た本当の中国を知ることができました。

共に行動したアジアの若者から得たことを一つも無駄にしないように、将来の自分に役立てるよう誓いたいと思います。

「国際会議に参加して」～異文化交流とは～

大橋真由美
［立命館大学大学院　言語教育情報研究科］

今回、この会議に参加するにあたり、「異文化交流とは、どういうことなのか。」を改めて考えました。

そもそも、異文化交流とは、異文化の交流ですが、異文化には、国、地域、社会、学校、家庭、個人による異文化など、様々な定義があると思います。私自身、大学を卒業し、社会に出てからというもの、日本以外の国の方と接する機会はありましたが、自分より若い世代と接する機会がほとんどなかったため、テレビ、新聞、インターネットなどのメディアの情報を通して、「最近の若い世代は･･･」という固定概念を持っており、参加する前から、各国の高校生、大学生とうまく交流できるか、不安でした。ですが、国際会議に参加し、グループワークを通して、交流していくうちに、当たり前のことかもしれませんが、世代、国にかかわらず、様々な意見、しっかりとした考えを持っていることを実感し、私自身、歳を重ね、知らず知らずのうちに、社会的立場や経験で、どこか上下を意識してしまい、正面から向き合うことを忘れてしまっていたようです。

各国の高校生、大学生と交流していくうちに、相互理解するためには「正面から相手と向き合うこと」が大切だということを改めて実感しました。

今後、今まで以上に情報化が進み、日本にいながら、様々な情報を知ることができるようになってくると思いますが、情報の波にのまれることなく、情報を読みぬく力を養う必要があると思います。情報を読みぬく力で、多くの情報から固定概念や先入観というフィルターを取り除くことができ、「正面から相手と向き合うこと」ができるのではないでしょうか。どんな国、どんな世代、どんな人でも、正面から向き合うことで、国による異文化、世代による異文化、人による異文化を理解できるのではないでしょうか。

今回の会議を通し、異文化について考え、相互理解するために、何が必要なのか、を考えるいい機会になったと思います。

会議に参加できたことに、感謝し、これからもこのような会議が続くことを願っております。

気負いのないコミュニケーション

里　才門
［記録映画制作部］

個人的な話しになりますが、１０年前、高校生であった僕は学生交流のメンバーの一人としてこの会議に参加しました。その時は今回学生達に課された、あるテーマの下でリサーチを行いグループとして発表をする、という課題はなく、極めてシンプルに同じ年代の他国の学生達と交流をするという体当たり的なものでした。それから１０年、僕は学生交流の記録映画制作班として、再びこの会議に参加させて頂きました。

グループ発表があるにせよ、体当たり的に交流をはかるにせよ、乱暴な言い方をすれば学生達は現場で‘いきなり”コミュニケーションをとらなければなりません。コミュニケーションをとるという点では学生達だけに限った事ではありませんが、彼等の場合、そのコミュニケーションがいたって個人的な所から始まり、個人的な所に終結します。名前は？好きな歌手は誰？どこで遊ぶの？卒業の後にする事は？大学、就職は？兄弟は？はたから見ればそれらはごく普通の質問ですが、それらのやりとりの中で、素敵な事に学生達は知ったフリをしません。何かを背負っているという気負いがない分（もしくはそこまで意識をしていない分）とにかくどこかで相手と接点を見いだそうと試み、見つかれば歓びます。そして個人的な所に終結した他国の同年代の者達とのコミュニケーションの産物は、個々の糧になります。

大半の学生達にとって異国の地であった上海で、それぞれのテーマのリサーチをする彼等をカメラのファインダーで覗きつつ、１０年前を思い出しながら、今回の会議もまた、学生達だけにではなく我々参加者全員にも新しい「考える種」を植えたのではないかと思いました。

アジア教育国際会議　上海 ― わずか３日間で得られること

逢坂芳郎
［記録映画制作部］

今回の国際会議におけるドキュメンタリー映画の主題は、「異国間の学生達の協力・共生」を描くことでした。私達制作部は、会議が行われた３日間、それぞれのグループに密着しました。カメラを生徒の視点に合わせて、彼等の実体験と心の変化を映し出すことを試みました。

結果からいうと、最終日の発表会の場で学生達はそれぞれに個性的で感動的な発表とスピーチしたことで会議は成功を収めました。３日間という短い時間の中からそのような多種多様な発言を考えだし、成長した学生達の表情は、この国際会議が持つ大きな力であると、私は感動していました。また、このような機会をできるだけ多くの学生に与えて欲しいと願いました。

その成功の陰には、開会式前日夜に行われた打ち合わせの一幕があったと私は思っています。そこで井嶋代表が、集まった学生達に与えた条件は、「自分たちのやり方で」自由に課題に取り組むことでした。その時、生徒の間では驚きと喜びの声がありますが、この後のグループ行動で様々な壁に当たることになります。自分の意見が出てこない、まとまらないといった、自分自身の問題、グループ内での意見の対立、そして言葉の問題から生じるすれ違い。密着している間、このような場面はよく見られました。また、私達カメラの存在を忘れて考え込む生徒の表情は、若者の真に迫った美しいものでした。彼等は気づかないうちに自主性と発表に対する責任感を問われた状態で、この３日間を過ごしていたのです。その結果、発表会の感動が生まれたのではないかと思います。

協力、理解、思いやりという気持ちは会議全体にあり、また、会議を通して参加者全員に広がっていったと感じました。記録映画制作部としても非常に良い環境で、言葉の通じない外国の土地で、ひとつの心配もなく撮影できたことには、関係者全ての方々への感謝の気持ちで一杯です。

ＮＰＯ法人日韓・アジア教育文化センター　概要と連絡先

設立意図

本センターは、発足を志した私達、それに賛同下さった人々の歴史、経験、実践を統合し、日本と韓国を基軸にアジアの視野から、国内外の次代を担う若い世代と共に、教育と文化に関わる国際交流・国際貢献事業を行うことを意図している。

私達はこの活動を進めるにあたって、日本語・日本文化を端緒に置くことで、現在の国際化・地球化社会での相互理解と創造について課題を共有して行きたい。

と同時に、教育文化と不即不離の関係にある、日本及びアジア各国・各地域の芸術・芸能、また生活文化にも眼を注ぎ、その相互交流、相互啓発の歴史と現在をも再認識したいとの思いがある。尚、将来的には「アジアから環太平洋へ」との期待もある。

この意図を具体化するために、賛同、支援下さる国内外の機関・人々と連携し、計画及び実施準備を進めている事業は、次の諸項である。(以下の表現での、中国と台湾の併記には注意を要するが、そのままとする。)

1. 日本と韓国・中国・台湾・インドとの高校を中心とした教育交流及び学校教育・芸術文化に関わる研修・交流企画、及びその運営
2. 日本語教育と国語（科）教育の連動を拠り所の一つとした、海外帰国子女教育・外国人子女教育・外国語教育・国際教育・異文化間教育に関する、研修・国際会議の企画、及びその運営
3. 韓国・中国・台湾等アジアの国々・地域から日本の大学等に留学、入学を希望する生徒への日本語指導及び日本の学校紹介、また留学、入学後の助言・支援
4. 海外在留児童生徒を主な対象としての日本語表現指導と国内受け入れ校情報の発信、及び主に帰国児童生徒を対象としての日本語表現指導
5. 海外帰国子女教育・外国人子女教育が有する教育への警鐘性の再構築
6. 韓国の高校生を主な対象にした日本語教科書の共同執筆と刊行
7. 日本国内での韓国語・韓国文化教室の開設と運営
8. 韓国・中国・台湾・インドの高校・大学への留学、入学を希望する生徒への学校紹介、事前指導、また留学、入学後の助言、支援
9. 映像・音楽・演劇等芸術、芸能領域での若い人々の交流、及び紹介のための企画と運営

- ☐ 日本文化・韓国文化・中国文化・インド文化を学ぶ旅の企画と運営
- ☐ 関係の一般図書、関係の論集、センター広報等の出版物の刊行
- ☐ 交流・情報交換を意図した集いの場の運営

設立への経緯

日韓の任意研究団体である「関西日本語国語教育研究会」と「ソウル日本語教育研究会」との 1993年の出会い、そして両研究会共催による下記国際会議が、基盤となっている。

1994年から 1998年までの「日韓・韓日教育国際会議」

2000年の「アジア教育国際会議」

及び、法人認証申請中の 2004年 8月、第 1回「日韓・アジア教育国際会議」の開催。

（尚、2003年に韓国では、韓国全土の日本語教員ネットワークを目指した「韓国日本語教育研究会」が、「ソウル日本語教育研究会」を核にして発足した。）

発起人・賛同者・支援者

以下、発起人及び理事・監事を含む法人申請時の委員、また賛同・支援の人々を記す。
他にも多くの方々が賛同・支援の意思表示を下さっているが、ここでは、代表の形で記す。[ＡＢＣ順・敬称略]

趙　成範	韓国日本語教育研究会長
田　泰重	ソウル日本語教育研究会長
張　国強	中華人民共和国教育部人民教育出版社課程教材研究所
藤澤　皖	外務省子女教育相談室長
井嶋　悠	前千里国際学園入学センター長
生野康一	全国海外子女教育国際理解教育研究協議会事務局長
李　瑛鍰	ソウル日本語教育研究会理事
河野申之	学校法人睦学園理事長
小島　勝	龍谷大学教授
加藤正彦	帝塚山学院大学高・大連携室長
権　俊	前ソウル日本語教育研究会長
工藤節子	台湾東海大学専任講師
森本幸一	小林聖心女子学院小学校教諭
松尾信恵	リクルート社員：慶應義塾大学在籍時日韓学生フォーラム委員
宮副裕子	香港理工大学副教授
野島大輔	千里国際学園社会科教諭
中村亮介	千里国際学園社会科教諭
中野佳代子	国際文化フォーラム事務局長
小山和智	グローバル化社会の教育研究会事務局長
朴　且煥	ソウル日本語教育研究会副会長
呂　善九	韓国日本語教育研究会事務局長
梁　安玉	香港城市大学高級講師
佐藤郡衛	東京学芸大学教授
シャミ ダッタ	千里国際学園社会科教諭
高寺厚實	箕面自由学園小学校教諭
坪山由美子	国際交流基金日本語国際センター教員
米田伸次	帝塚山学院大学国際理解研究所顧問

通信等

今年 5月に「通信」第 1号を発行しました。
また 11月には、メール通信による「センターの現在と次年度」を作成しました。
閲覧ご希望の方はご連絡ください。

通信等

●井嶋 悠 …… y_ijima@jttk.zaq.ne.jp
●森本幸一 …… morimotokouichi@hcc6.bai.ne.jp
●朴 且煥 …… chahwanpark@hotmail.com